

山村再生担い手づくり事例集Ⅱ

矢作川流域圏懇談会

2015年3月

矢作川流域圏懇談会 とは…

矢作川流域は矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもとでさまざまな課題に取り組んできた歴史があります。

2009(平成21)年7月に河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取り組みが必要であることが明記されました。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010(平成22)年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取り組みを行うことで、流域圏全体の発展につなげることを目指す「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げました。

矢作川流域圏懇談会は山部会、川部会、海部会で構成され、各部会で学識者・行政・関係団体・市民団体などのメンバーが連携して地域の課題を抽出し、その解決方法を探っています。また部会間の連携によって、持続可能な流域圏のあり方を模索しています。

山村再生担い手づくり事例集 とは…

矢作川流域圏懇談会山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。解決の糸口として、矢作川流域で農業、林業、林産業、定住支援などの中山間地振興に携わる団体・個人の活動情報を共有し、生産者と消費者、農村と都市の住民、関連する団体・個人同士のネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」の作成を提案しました。2014(平成26)年度に第1集が刊行され、本冊子は第2集となります。今年度は試行的に、川と海の活動団体も取材対象としました。

この事例集によって流域住民の中山間地振興に関する意識を啓発することを目指すとともに、その具体的な支援方法を示します。そしてゆくゆくは流域内全域でお金、人材、物がまわり、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が達成されることを目指します。



目 次

長野県

根羽村

- 1 木の駅ねばりん実行委員会 1
- 2 きくの会 4

岐阜県

恵那市

- 3 山のハム工房 ゴーバル 6
- 4 三宅林業 9

愛知県

設楽町

- 5 たけうち牧場 11

豊田市

- 6 アンティマキ 14
- 7 てくてく農園 16
- 8 あさひ若者会 18
- 9 足助里山ユースホステル 20
- 10 新盛里山耕流塾 23
- 11 近藤しいたけ園 26
- 12 こいけやクリエイト 28
- 13 アグロ・プエルタ 30
- 14 とよたプレーパークの会 32
- 15 NPO法人矢作川森林塾* 35
- 16 矢作川水族館* 37

岡崎市

- 17 じさんじよの会 39
- 18 額田林業クラブ 41
- 19 宮ザキ園 45

西尾市

- 20 東幡豆漁業協同組合* 48
- 21 佐久島Oyaoya cafeもんぺまるけ* 51

木の駅ねばりん実行委員会

調査団体名 : 木の駅ねばりん実行委員会
 設立年 : 2013年8月
 団体URL :
 活動拠点 : 長野県下伊那郡根羽村
 取材日 : 2014年12月13日

団体代表者名 : 石原明治委員長
 対応してくれた人の名前 : 南木一美副委員長・事務局
 調査員 : 沖 章枝、松井賢子、浅田益章
 レポート作成者 : 浅田益章

活動内容

根羽村は豊田市役所から65kmと山深い所にある。根羽村のある国道153号線は風光明媚な自然がいっぱい。杉だらけの美しい村である。木の駅ねばりんはこの村で活動している。地元の豊富な杉の間伐材を、地元で建設中の高齢者福祉施設の暖房など、薪ボイラーによる燃料として使うことで、村内の地産地消の循環経済が成り立たないかとプロジェクト組織で推進している。2015年3月に予定されている高齢者福祉施設ねばねの里「なごみ」の開館が待たれる。村内流通の地域通貨、森券によって地域を活性化させる。広がる夢は大きい。

キャッチフレーズ

村のおじいとおばあのと心と体を暖める

会のモットー(何を大切にしているか)

山に向き合う為の仲間づくり

設立から現在に至るまで変化したこと

- ①毎月委員会を開催している。
変化点を見つけて早い手が打っている。
- ②第一期終了後、実行委員会と別組織で“薪の駅”をたちあげた。
非営利の木の駅プロジェクトと営利の薪事業と混乱が起きやすいが分けるのは難しい。
森林組合との信頼関係、相互理解を大事にしている。

連携している団体・専門家・自治体など

- ①根羽村森林組合長 ②根羽村役場
- ③根羽村内には多くの小規模の活動団体がある。村の元気のもと
- ④村外の団体「全国スギダラケ倶楽部」やドイツ・レッテンバッハ村と根羽村の交流、連携

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- ①次世代がメシを食えるように。自分の持っている山を次世代につなぐ意識と山作業
- ②不在森林については森林組合がやっている。
- ③木の駅はハードルを低くして始めた。出荷者が安全安心に出荷できるように安全第1のスキルアップのしくみづくり
- ④気持ちよく自己責任が基本。仲間で助けあう
平均年齢60代後半。最近50代が盛り上がっている。20代の登録者もいる。

現在直面している課題

- ①山に向き合う仲間づくり
- ②出荷量の確保
- ③木の駅実行委員会と薪の駅との棲み分け

今後やってみたいこと

現状自伐は少なく、大半は施業跡地の林地残材の収集。木の駅メンバーで山の間伐、搬出をやりたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

下記の団体と連携し進めている。

- ①木の駅プロジェクトとの連携、情報交換 <http://kinoeki.org/>
- ②矢作川流域圏懇談会との連携、情報交換 <http://www.cbr.mlit.go.jp/toyohashi/kaigi/yahagigawa/ryuiki-kondan/>
- ③日本全国スギダラケ倶楽部との連携、情報交換 <http://www.sugidara.jp/>
- ④木の駅アドバイザー 丹羽健司さんなど。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

国交省や行政からの支援、指導を受けていますか？

<答え>

国交省の支援は受けていません。村役場との協同であることが大きい。

その他、伝えたいこと

単に木材を売るだけではなく、より身近で気軽な木のある暮らしの提案と、根羽村の地域の魅力が体験できる交流とファンづくりを進めたい。

取材者の感想

取材した浅田が感じたことを最後に書きます。

訪問取材は2014年12月13日と2015年2月7日に行われた「根羽村 ここは世界の真ん中発表会」です。知らないこと、驚くことばかりの村でした。「根羽村は日本で一番幸せな村を目指しています。」は本当ではないかと思いました。春夏秋冬。何度でも訪ねたい村です。矢作川の上流にあることが愛知県人としても嬉しいです。

- ①村内の林業の専門家は2軒ある。昔は10軒あったからずいぶん減りました。
- ②剰余材なので木の駅では売っていない。木材が欲しい人は森林組合で買えます。協力して行っている。
- ③新聞記事によると、木の駅プロジェクトの年間搬出量は2013年度目標で約300立方メートル。集荷者登録は32世帯。手間賃として支払われた地域通貨「ねばね森券」は44万円。村内の22のお店で利用された。
- ④高齢者福祉施設への薪の供給の次に考えていること。
薪ボイラがもっと増えてゆく予感がしました。家でも事業所でも木の駅があれば便利になるでしょう。薪ボイラーは広葉樹しかダメであるが、オーストリア製(シュミット社)の薪ボイラーはスギ、ヒノキもOK。ヨーロッパには先進的なボイラーがある。豊田市すげの里には、シュミット製の薪ボイラー、薪ストーブがあるとのこと。 <http://www.ato-nagoya.com/experience/index.html>



① 木の駅実行委員会の南木さんに取材。キャロットにて



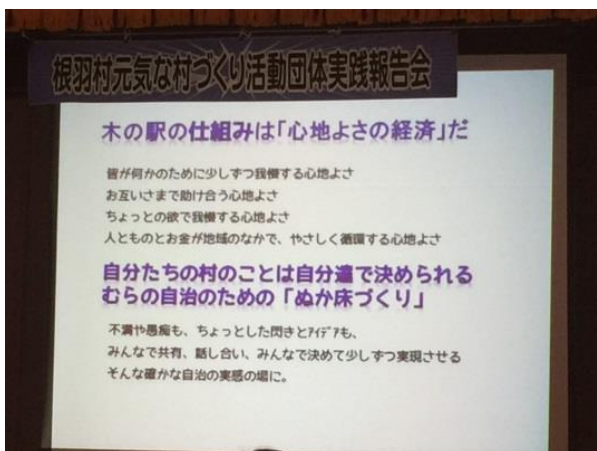
② 木の駅。153号線キャロットの隣にて



③ 建設中のねばねの里なごみ。ここで間伐材が薪ボイラーの燃料として利用される



④ 木の駅プロジェクトのしくみ
根羽村活動団体実践報告会にて



⑤ 木の駅プロジェクトの目的
「心地よさの経済を自治で」



⑥ 日本で一番幸せな村を目指して。
ドイツのレッテンバッハ村とも交流

きくの会

調査団体名 : きくの会 団体代表者名 : 田中きく江
 設立年 : 2007(平成19)年9月 対応してくれた人の名前 : 田中きく江 はじめ会員8名
 団体URL :
 活動拠点 : 根羽村老人福祉センター「しゃくなげ」 調査員 : 松井賢子、浅田益章、沖 章枝
 取材日 : 2014年12月20日 レポート作成者 : 松井賢子

活動内容 :

根羽村のような小さな村でもお葬式が村外で行われるようになって、村内の高齢者から遠くて出席できないと耳にするようになった。平成19年9月「きくの会」を設立。
 食事作りのお手伝い・・・会席・精進おとしの料理をつくっている。
 お葬式を「しゃくなげ」で執り行った後の「会食」を提供。会員8名、協力員70名で現在に至っている。
 48回会食を作った。前日、手分けをして「地元のものをそろえる」「地元のお店で買い物」等で必要なものをそろえる。
 依託人数によって、8名の会員以外に10人に1人の割でお手伝いを頼む。

キャッチフレーズ :

食材は、「地元のものを使い」「そろわないものは地元の店で購入し」「地域の活性化！」

会のモットー(何を大切にしているか) :

昔の「結」が高齢化で出来なくなり、「有志」が集まって、昔から伝わっている「お葬式」・「精進おとし」の食事を、地元の食材、地元のお店で購入したものを使って作る。

設立から現在に至るまで変化したこと:

有志が集合して、職員の松井さんにアドバイスを頂き、8名で「楽学会」を発足。まず何から取り組むかの話し合いで、女性議員誕生を目ざし、神奈川に勉強に行き、平成19年4月石原明子さんが13名中4番で初当選し、まず(第一)の目標達成。次に「いかまい会」を発足し、何をしていくか検討した結果、現在の「きくの会」が出来た。
 現在は「根羽村の子どもを守りましょう」の看板をつくり、小中学校や事業所に配布して、運動展開中。

連携している団体・専門家・自治体など:

根羽村役場、会席場として借りる「しゃくなげ」の職員

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など):

昔から根羽村に伝わっている「お葬式の食事」の食材を、会員と70余名の協力員を中心に提供して頂いている。地元の商店も注文した物をそろえて下さっている。地元にお金が入る様に協力している。

現在直面している課題 :

村内の自宅に住んでいない人が多くなりつつある。葬儀屋さん「しゃくなげ」で執り行ってもお料理は外から運んでもらい、最近は「折り詰め」でなく「きくの会」の様に「皿もり」「汁物」で出る様になって、注文取りが難しくなってきた。

今後やってみたいこと:

「お通夜」の食事作りをしていきたい。地元のスーパーで「おさしみ」を購入して、地元に貢献して下さる家もある。
 「お通夜」「葬儀後の会食」「精進おとし」と一貫して行っていくことを目指している。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か：

区長さん、役場の方たちに声かけをして利用していただけるようお願いしている。
村内の人たちにもっと地元にお金を落としてもらい、村の活性化に協力して下さるよう理解してもらえることが課題である。

チームオリジナルの質問：

＜質問内容＞「根羽村の子どもを守りましょう」の看板をどのように生かしているか？

＜答え＞小・中学校の校門前に毎朝7時から40分立って、全校生徒とあいさつをしている。「あいさつ運動」として。

チームオリジナルの質問：

＜質問内容＞これからの「きくの会」の新しい目標

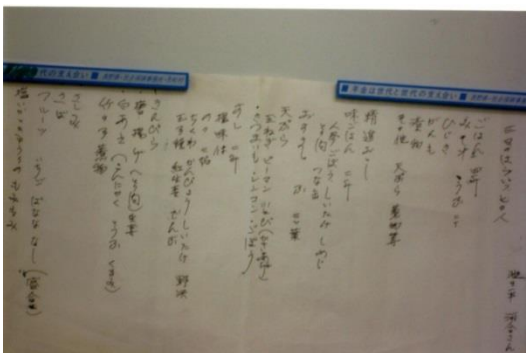
＜答え＞4月の選挙に向けて「第二の女性議員の当選」

その他、伝えたいこと：

・「ジャンボからすみ」作りに挑戦……一応できた。

・根羽村再発見……史跡めぐりを3回行った。「ネバーランド」だけでなく、外から多数の人達が来て、楽しんでもらうため、考えている。

写真



山のハム工房 ゴーバル

調査団体名 : 山のハム工房 ゴーバル

設立年 : 1980(昭和55)年

団体URL : <http://gobar.jp/>

活動拠点 : 岐阜県恵那市串原3777-3-1

取材日 : 2014年11月25日

団体代表者名 : 石原 潔

対応してくれた人の名前 : 石原 潔

調査員 : 山本薫久、國村恵子、田中五月

レポート作成者 : 山本薫久

活動内容

山のハム工房 ゴーバルは、旧串原村、標高600mを越す静かな山のなかにある。豚を育て、加工し、ハムやソーセージをお客様の食卓に直接届けている。冷蔵や冷凍の宅配便のない1980年から小さな工房ではじめて化学調味料や添加物を一切入れない手づくりのハム。岩塩のピクル液で20日間熟成させ、炭火でゆっくり乾燥させ、桜の薪でいぶす。そんな昔ながらの作り方はすこし大きくなった今の工房でもかわらない。

はじめは岐阜県農業共済組合連合会で獣医をしていた石原潔氏、愛農高校教員をしていた武義和氏、基督教独立学園の畜産職員をしていた榎本進氏の3人が、石原氏の妻眞木子さんのご実家(串原村)で共同農場をつくったことである。ネパールやインドの言葉で牛糞を意味する「ゴーバル」を使い「アジア生活農場ゴーバル」とした。「御言葉に生きる」「農業を通してアジアの人々をつなげる」「田舎にいて都会の人々をつなげる」を目指しまざまな取り組みをしてきた。

そして地元の地域とのかかわりを重んじ、村の共同作業、保育園や学校の行事、消防団活動などを積極的に担ってきた。地元の養豚農家3軒とのかかわりのなか1986年に「串原食肉加工組合ゴーバル」、2005年ごろより「山のハム工房ゴーバル」という通称を使いだした。今では石原氏のご子息石原弦さんが養豚をはじめられ、ゴーバルのハム・ソーセージにもなっている。肥育期の飼料は植物性にこだわり、遺伝子組み換えでないトウモロコシと大豆粕、大麦などを使う。母豚の環境にも配慮して飼育しているそうである。

山間地域の貴重な「雇用」の場になっている。そして若い人の就農、I ターン の機会にもなっている。現在21人の方が働いてみえる。近所の方々もパートできてみえる。若い人は山形県の独立学園高校、三重県の愛農高校、島根県の愛真高校の卒業生が多いそうである。この地に移住する方が少なくない。現在フルタイムで働く方の中心は30代、40代が多い。田舎でやりたいことをやりながら働くあり方をすすめている。

キャッチフレーズ

「ゆっくり流れる時間の中で」

・3週間お肉をねかせる事から始まって、ゆっくりと時間をかけている。だから、おいしい食べものがうまれてくる。

・水や空気、自然に助けられてゴーバルの味がつくれる。

・いっしょにみんなでごはんを食べる。自分で考えて仕事をする。そんなゆとりこそが大切。むだ話もしながら仕事はやったほうがいい。「仕事は上機嫌でやれ！」三宅弥生さん(かつてパートで来てくれていたが、今は定年退職)が残してくれた言葉を大切にしている。

会のモットー(何を大切にしているか)

「生きることはわかちあうこと。LIVING IS SHARING」

ネパールの青年から学んだこと。時空をみんなでわかちあうからこそ、楽しんでくらせるのだと思う。

設立から現在に至るまで変化したこと

ゴーバルの「精神」やあり方は変わっていないし、そこは変わらないと思う。しかし、養豚を直営してハム・ソーセージをつくるようになり、ますます「地に足がついてきた」と思う。

連携している団体・専門家・自治体など

愛農生産組合（農家の方々）、全国愛農会、愛農流通センター

山村再生やその担い手づくりに関る具体的な活動

- ・グローバルでみんなと働き暮らすこと自体で山村再生に貢献している。
- ・地域の自然と人々との関係を最大限活かした食と仕事をつくりだしている。
- ・若い方の農的暮らしの研修の場になっている
- ・地域の雇用の場になっている
- ・就農や農山村へのＩターンの機会の場になっている
- ・福島子ども元気プロジェクトやフェアトレード・被災地関連商品など、山村のグローバルだからできる社会貢献をしている。とくに福島子ども元気プロジェクトは、被災地の子供達の保養キャンプであるが、地域の方々のたくさんの応援もあり成立する。

現在直面している課題

- ・物理的なこととしては、今の工場も建設して30年近くになるので設備更新をどうしようか考えている。生産量は求められているものギリギリになっている。ただ増やしていくのがいいのかというそもそもの課題はある。適正規模はどのくらいなのか考えながらやっている。
- ・組織的には「組合」。今後永続させるには「法人格」が必要なのか。みんなで考えていく。
- ・創設メンバーから次の世代へのバトンタッチも現実の問題となっている。
- ・養豚についてはTPPの問題もあり、伝染病予防対策もあり、気候だけでなく、社会経済的変動も予想され、これからの問題を抱えている。

今後やってみたいこと

- ・「ゆっくり流れる時間のなかで」「生きることはわかちあうこと。LIVING IS SHARING」
いままでのようにやっていけたら。現在のスタッフやこれから来る人も含めて、内側から出てくる生き方を伸ばせるように展開したい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>ご子息が養豚をされているが...

<答え>息子も独立学園で学び、ネグロス島で養豚を体験してきた。養豚は10年やっている。ここ数年考えてやっているのは「動物の福祉」。食べてしまうのだが、しかし豚が豚らしく、本来の習性にあった飼育をして、元気に健康に育ててもらいたい。そのために古い豚舎を改修している。運動スペースもつくっている。子豚がおもいきり走れるスペースとか...。飼料は遺伝子組み換えでない大豆・とうもろこしなど十分気をつけている。豚に対するストレスがないよう、環境的に配慮している。母豚も適正な頭数にしている。現在母豚が100頭。

チームオリジナルの質問

<質問内容>母豚100頭でグローバルのハム・ソーセージに十分ですか？

<答え>母豚1頭で1回に10頭の子豚を産みます。年に2回出産するとして、年間2000頭になります。グローバルだけでは使いきれないです。息子の出荷している肉豚の半分強程度をグローバルが使っている状態です。また、豚を1頭まるごと使うことを考え工夫している。豚全体をつかうことが大切なのだと考えています。今年は雨が多かったので豚の飼育はきびしい。

取材者のコメント

養豚も自然の条件、環境で生育が大きく左右される。やっぱり農業なのですね。自然農ではそだてた作物すべてをいただくことが重視されていますが、養豚でも同じ考えなのがおもしろいというか納得しました。

写真

1980年から小さな工房ではじめた、化学調味料や添加物を一切入れない手づくりのハム。岩塩のピクル液で20日間熟成させ、炭火でゆっくり乾燥させ桜の薪でいぶす。そんな昔ながらの作り方はすこし大きくなった今の工房でもかわらない。(活動内容本文より)



三宅林業

調査団体名	三宅林業	団体代表者名	三宅隆美
設立年	1978(昭和53)年	対応してくれた人の名前	三宅隆美
団体URL			
活動拠点	岐阜県恵那市串原木根3399	調査員	丹羽健司、洲崎燈子
取材日	2014年 11月 21日	レポート作成者	洲崎燈子

活動内容

林業(伐採・搬出)と建築、製材、ストーブ用の薪の生産を行っている。代表の三宅さんは林業の一人親方で、必要に応じて人を雇って作業をしている。建築はもう1人のメンバー、大工の松井瑞穂さんが担当している。

林業: 山主と契約を結んで行っている。山づくりにあたっては、今お金が欲しいか、孫の代にいい木を残すのかといった、山主の意向を確認するようにしている。支障木等の特殊伐採もしており、依頼があれば東京や三重まで行くこともある。こうすれば口コミで仕事の人脈ができる。助け合い、結の精神で林業をやっている。

建築: ハウスメーカーにはできない、自然に逆らわない、自然の木の良さを生かした家づくりを行っている。地元の木を2ヶ月～半年かけて天然乾燥して使う。10年位前までは地元の木で家を建てるのがもっとよくあった。よその山で木を伐らせてもらい、伐採の費用はもらわずに伐った材をもらうこともあった。物々交換のようなもの。

製材: 三宅林業を立ち上げてから5年後、林業だけでは食べていけないと考え製材も手がけるようになった。やり方は丁稚奉公に行ってみよう見まねで覚えた。

ストーブ用の薪の生産: 名古屋、大府、瀬戸などの個人向けに、カナギ(広葉樹)の薪を販売している。長男の勤める設計事務所で薪ストーブのある家を建てた施主にも提供している。

キャッチフレーズ

木は自然の贈り物、十人十色の木を生かす

会のモットー(何を大切にしているか)

林業: なるべく丁寧に仕事をするようにしている。(奥矢作森林塾の)大島光利さんには、「銭金抜きでいい仕事をする」と言われている。山主に少しでも多くの利益を返したい。森林組合の仕事はなるべくやらないようにしている。仕事の段取りが合わない、負担が山主の方になってしまう。

建築: この辺りの木は東濃ヒノキと三河ヒノキの中間的な性質を持っており、赤味があって材が堅いのが特徴。矢作川の向こうでは木が変わる。建材を伐り出すのは秋の彼岸から春の彼岸までの時期。それ以外の時期に伐った材は柔らかいので市場に出してしまう。

木は自然の贈り物。木を伐ることは木の魂を頂くこと。1本の木をどう生かすかということを考える。南向き斜面の木は家の南側の柱にすると木も嫌がらない。一山千本の木を伐れば、伐った木をどこに使えばいいか分かる。木も十人十色。こういうことが分かる大工と仕事をしないとダメ。今の棟梁とはあうんの呼吸で仕事ができる。木を挽く時に迷うことがあると助言してもらう。

設立から現在に至るまで変化したこと

特になし

連携している団体・専門家・自治体など

連携しているのは個人のみ。大手とつき合うとたたかれる。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

林業、建築、製材、ストーブ用の薪の生産

現在直面している課題

特になし。2人の息子が自分の志を継いでくれている。長男は1年棟梁について大工仕事を覚え、今は設計事務所に勤めている。次男には山仕事を教えて、大体覚えた後に大工を5～6年やっている。1985年にケガをした時、子ども2人で相談して山仕事をすると決めたという。指が動かないので薪を出荷するのに子どもを連れて行って手伝わせた。山にも連れて行き、知らない間に仕事を覚えた。

今後やってみたいこと

特になし。やりたいことはやれている。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞林業は家業だったのですか？

＜答え＞以前は百姓をやっていて、たまにアルバイトで林業をしていたが、雇い主が亡くなったので自分でやろうと思い、松井さんと2人で三宅林業を立ち上げた。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞特殊伐採について教えてください。

＜答え＞特殊伐採は年に何度か手がける。森林組合に委託すると高い。以前奥多摩で、クレーンで高いところに上って伐採する空師（そらし）の仕事振りを見て、自分もやろうと思った。人がやっているのを見て覚えた。先頃、旭で伐った樹齢400年の巨木は、自分の前に3人の人が伐るのを断念した。伐採した木材は名古屋の神社をつくるために使われた。ワイヤーをかける時に間違えると伐った木に挟まれるので大変危険。大きい木は上から玉切りしていくが、一番お金になるように伐る。博打のようなもの。いっぺんに段取りする必要があるので疲れる。

その他、伝えたいこと

- ・自分の体で覚えたことは忘れない。
- ・山主にはいい木を残せと言っている。それができないなら、山を大事にしてくれる人に地付きで売った方がいい。今の山主は木の性質が分からない。昔の山主は熱心で、作業も自分でやった。
- ・今の串原は若い人が元気。皆が仲良くなるといい。

写真



取材風景。いずれも右側が三宅さん

特殊伐採の様子

たけうち牧場

調査団体名	： (株)たけうち牧場	団体代表者名	： 竹内通王
設立年	： 1971(昭和46)年	対応してくれた人の名前	： 竹内通王
団体URL	： http://teleco.jp/takeuchi/		
活動拠点	： 愛知県北設楽郡設楽町西納庫字駒ヶ原	調査員	： 浅田益章、松井賢子、沖 章枝
取材日	： 2014年11月15日	レポート作成者	： 沖 章枝

活動内容

牧場経営：

父母が戦後入植開拓した標高900mの段戸山麓で、独自で肉牛の肥育を手がける。酒造会社勤務をした後入学した八ヶ岳農業実践大学校卒業後の23歳から始める。当初、農業後継者育成資金75万円を借り、生後1週間ぐらいの赤ちゃん乳牛にミルクを飲ませ育て、6ヶ月齢の素牛として売り回転させた。11頭の牛から開始。この時、牛舎は古材を買って手造り。以後スクラップ&ビルトを繰り返す。0.1歩でも前進したいと思ってきた。牛が500頭になれば人も雇えるようになると考え目標にした。

これまでにオイルショック、BSE、カイワレ騒動に翻弄されたこともあった。現在、牧場で450から500余頭を肥育。農業制度資金の融資を受ける時は、設楽町に保証人になってもらえる親戚もないため、友人とお互いの保証人になり合ったりを繰り返してきた。理解を得るため“ビーフ祭り”を催したことも。自己資本比率を高めようと努め、10年程前に100%達成。息子が後継者として戻ったので、今は新事業融資を受けている。

2014年8月、農業者としての究極の願いであったここで育った牛を、この空気の中で地元の新鮮な野菜と一緒に味わってもらおうという、『農園レストラン&BBQばんじゃーる駒ヶ原』をオープンさせた。従事者5人、パートさん3人。

地域活動：

○広い設楽町に若い農業者はそんなに多くなく、線や面で繋がる必要があると思い、同世代の者で、『設楽町農業青年会』を設立。丁度、四国の池田高校が甲子園に出場し優勝した頃で、「やる気になったら何かできるんじゃないか」と考えた。全国農業会議所主催の『若い農業者グループ活動コンテスト』に応募し、農林大臣賞を獲得(全国表彰)。

○『ばんじゃーる 自然塾 駒ヶ原』を開催 ※ばんじゃーる は、インドネシアバリ島地方の最少社会生活単位を表わす言葉。日本の『結』『講』にあたる。

○『山を拓き ここに暮らしを創る—愛知県段戸山麓戦後開拓集落 駒ヶ原・沖ノ平の聞き書き—』を2013年3月に発行。沖駒区開拓聞き書き実行委員会を立ち上げ実施。編集 山里文化研究所。

○沖・駒プロジェクト…旧駒ヶ原分校の校庭で、地域の人や自然が好きという若い賛同者で4月から11月第3日曜日にログハウスづくり。2013年に1棟完成、2棟目を建設中。丸太小屋造りの体験を通して交流事業をしている。

○R153からR257をつなぐ広域農道が建設中だが、ナナカマドとモミジを農道沿線に植栽し、ナナカマド街道を計画している。まだ名倉まで繋がっていないが名倉から津具へ。津具には先輩たちが植えたササグレモミジの街道があるのでそこへ繋ぐ予定。

○名倉で今春(2015年)から始める、中日新聞・中日文化センターと共催の『名倉でおいしいお米をつくろう』の講座を引き受けた。都市の人に、体験を通して農山村の楽しみ方や、地元住民との交流を図る事業を行う予定。(名倉地区営農推進協議会)

キャッチフレーズ：

希望は外でなくここにある

会のモットー(何を大切にしているか)：

親たちが苦勞をして拓いてくれたからこの地がある。このことを忘れないでいたい。
ここで暮らし続けたい人やここへ入ってきたい人達と交流して、次世代の人が住んでくれる環境を創りたい。

設立から現在に至るまで変化したこと:

場所を嘆いてはなにもできない、ここは山の中だけれど日本列島の真ん中、全国どこへでも行けると、肉牛を東京芝浦の市場へ出荷していた。BSE騒動で価格が大暴落し、実際にこの時捨て犬のように捨て牛さえもあった。東京で、どこへどんな売られ方がされているかわからないと思って、愛知万博の少し前、顔が見える範囲の東海地方へと出荷先を変えた。この時、直売の免許を取って牛肉を売りに行ったこともある。ぼちぼちではあるが、県内でこの肉『段戸牛』を使いたいというシェフもでてきてくれた。段戸牛の特設コーナーを設けてくれているスーパーマーケットもある。人に恵まれたお陰で『農園レストラン』が開店できた。このことでまた、たくさんの人との出会いができた。不思議と同じような人が集まってきて、初対面同士が仲良くなるということも起きている。

連携している団体・専門家・自治体など:

東海農政局、6次産業化プランナー、愛知県農業改良普及課、JAあいち東、名倉地区営農推進協議会、特定非営利活動法人山里文化研究所

山村再生や、その担い手作りに関わる具体的な活動:

○地域の人や自然が好きという若い賛同者で取り組んでいるログハウスづくり ○ナナカマド街道計画 など
詳細は活動欄に記述。

※以前から矢作川流域の根羽村、豊田市・稲武・足助と堆肥や牛肉の連携がある。地域的にも隣接している。森の健康診断、ばんじゃーる自然塾実施における協力もある。交流がより広く密になるとよいと思う(取材者)

現在直面している課題:

肉牛肥育の経営を成り立たせるためにどうするかということ。海外への働きかけやハム業界のバイヤーも来ている。業者の中にはハラルの認証をとったところもある。量を増やして価格競争しても外国製品には負ける。基本は地元。手をかけても出来るだけきっちりした良いものを作っていかなければいけないと思う。

今後やってみたいこと:

国道153号線を段戸山方面に入ると高原の牧場風景が広がる。溪流は奥入瀬溪谷のようだし、なぐらのアグリステーション周辺は信州の安曇野に似ている。遠くまで行かなくても良いところがいっぱいあることを多くの人に知ってもらいたい。エコツーリズム、川遊びやバーベキュー、体験学習、ファーマーズマーケットなどをしたい。

6次産業の認証をとっているの、ビーフジャーキーやローストビーフの加工品づくり。若者たちがここで生活できるマーケティングもしたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か:

来る3月22日に豊橋鉄道主催でメープルツアーが予定されているが、いろいろな情報の発信や都市と農山村の交流を企画できる人がほしい。自然が好きで働く場を探している若い人を呼び込みたい。人がわざわざここまで足を運んで食べに来たいという料理や雰囲気を提供できるように取り組みたい。

チームオリジナルの質問:

<質問内容>①汚水が大雨の時に流出といった畜産の糞尿処理が問題になっているがここではどうしているのか? ②飼料はどのようにしているのか?

<答え>

①牛糞発酵プラント(ロータリ攪拌・エアレーション)1基、堆積発酵舎2棟、堆肥舎2棟の施設を駆使し、100%良質発酵堆肥を生産している。平成元年から豊田の堆肥屋さんと連携していて8割ぐらいいはそちらへいっている。あと2割ほどは、この近辺の名倉、稲武、足助、根羽へ4t車で配達(有価)をしている。堆肥も農家さんが望むような良いものを作るという気持ちがないといけないと思う。

②愛知経済連の設楽の里でブランドの配合飼料を作ってもらっている。そこに県内産飼料米を2、3%混ぜている。飼料の自給はいずれと思うが、耕作地や耕作の機械の問題などあってまだまだというところ。

チームオリジナルの質問:

<質問内容>③TPPの問題をどう捉えるのか?具体的にたけうち牧場の経営として怖いのか、怖くないのか?

<答え>③正直いって怖い。神戸牛や松坂牛など一部のブランド産地はいざ知らず、普通の農家は、これから先、飼料穀物の値上げも為替の変動もあるだろうし、世界的な穀物自給バランスの崩れもあるだろうから恐れている。中山間地にこれ以上の効率化をもとめることができない。TPPIによって日本の中山間地域が壊されるという恐れがある。TPPIは農産物の問題が大きく挙げられているが、報道されていない健康保険にも影響が及ぶのではないかと不安に思う。

その他、伝えたいこと:

ログハウスでは自然塾をやっている。最近すこし休んでいるが、これまで年2回ぐらいのペースで催し物をしてきた。ブータンへ行って来た方の話や千年持続学校の話をして頂いた。交通費ぐらいの謝礼しか出せないが、それでいいという講師を紹介してほしい。特にレストランが冬季休業する12月から3月までは全館内が空いているので、活用したいと思う。

写真



沖・駒プロジェクトログハウス



農園レストラン&BBQ「ばんじゃーる駒ヶ原」



ナナカマドの植栽



たけうち牧場ホームページより



アンティマキ

調査団体名	アンティマキ	団体代表者名	村田牧子
設立年	2003(平成15)年	対応してくれた人の名前	村田牧子
団体URL	http://blog.goo.ne.jp/nihonkamoshika		
活動拠点	豊田市夏焼町ワカチ383-5	調査員	蔵治光一郎、大島光利、森本徳恵
取材日	2014年12月5日	レポート作成者	森本徳恵

活動内容

周囲の野山で採取した草木で、染めものやリースなどを作る一方、環境や体になるべく負担の少ない素材を使った焼き菓子やパンの製造に携わる。直売所・どんぐりの里いなぶを始め、市街地のスーパーやまのぶ梅坪店などで販売するほか、豊田市とその近郊で開かれるイベントなどにも出店している。また、地元の体験施設・どんぐり工房では、毎月草木染めの講習会を開き、不定期に、焼き菓子やパンの講習会もどんぐり工房や市街地で開催している。他にも、地元の有機栽培の米農家を応援するために始めた「こめこなクラブ」では、山里に移住した人たちと田舎好きの都会人が集まって農作業を手伝っている。さらに、友人のユキさん(志工房主宰)とミキさん(Miki-Co-Labo 主宰)と組んだユニット「奥三河Three trees+」では、通信の発行やイベントでの出店協力などを行っている。「アンティマキ」は「まきおばちゃん」という意味。

キャッチフレーズ

草木染め「きさくにくさきぞめ」 焼き菓子・パン「易しく優しい焼き菓子とパン」

会のモットー(何を大切にしているか)

苦労はしないで工夫すること。草木染めを通じて、自然が生み出す美しさや不思議さを知ってもらうこと。手作りのよさ、面白さ、楽しさを感じてもらうこと。

設立から現在に至るまで変化したこと

京都で編集の仕事をしていた30代のころ、マクロビオティックの考え方に触れたのがきっかけで、田舎暮らしを志すようになった。12年前、先に田舎暮らしを始めていた両親の住む稲武地域に移住。ようやく夢がかない、草木染めとリースの工房「アンティマキ」を立ち上げる。8年前、家の改装を機に知人の勧めで菓子製造業の認可を取得。同時期に、大阪在住の友人のマクロビオティック料理講師を招いて、地元で講習会を開き、現在まで続けている。菓子製造業については、はじめは地元の直売所に少々卸す程度だったが、どんぐり工房での講習会や市街地のグリーンママン朝市での出店、インターネットによりネットワークが広がった。イベントでの出店や、焼き菓子やパンの講習会を開催してほしいという要望が少しずつ増えている。

連携している団体・専門家・自治体など

どんぐりの里いなぶ、green maman、(株)M-easy、スーパーやまのぶ、豊田市(おいでん・さんそんセンター)、愛知県交流居住センター(三河の山里だより)
奥三河Threetrees+のメンバー(天然石けんの志工房、コンフィチュールのMiki-Co-Labo)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

昔は牛馬の飼料や肥料として大事だった雑草は、今では邪魔者としてしか扱われていない。草木染め講習会では、百姓の敵・雑草から美しい色が生まれることを知ってもらい、参加者の自然を見る目が深まることを期待しているという。講習会の参加者からは、稲武を訪れるきっかけとなり、田舎が好きになったとの声がよくあがる。ブログやフェイスブックでは、山村暮らしの豊かさや楽しさ、しんどさを知ってもらいたくて、発信を続けている。

現在直面している課題

アンティマキの商品は村田さんお一人で制作・製造しているため、供給量に限りがあることが問題。ただし、商品製造のそもそもの目的は、人々に手作りの楽しさを知ってもらうきっかけになることでもあるので、講習会に参加して、作り方を覚えていただきたいと思います。

今後やってみたいこと

織物製作や土いじり、しばらく手がけていないナチュラルクラフトの制作などに取り組み、さらに田舎暮らしを楽しみたい。現在も行っているブログだが、もっと頻繁に発信していきたい。手軽に作れる、焼き菓子やパンのレパートリーをさらに広げ、市街地での講習会開催にも力を入れたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

これまで、green maman や株M-easy のメンバーと知り合えたことで、ネットワークが広がった。村田さんが田舎暮らしをころざしたのは30代半ば。いま、その年代の人たちが、田舎暮らしに興味を持ち、実践もしている。彼らとのネットワークをさらに広げたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 田舎暮らしブームの先駆けと思われるが、これから移住する人へアドバイスを。

<答え> 田舎に移住したい人は、田舎に馴染まなくてはいけないと意気込むと思うが、無理はしないほうがいい。そもそも、都会と田舎では文化が微妙に異なるということを頭の隅に入れておくべきだ。無理に馴染もうとすると、本来自分がしたかった田舎暮らしをあきらめざるをえないこともある。実際を言えば、昔と違って、田舎の人でも同じ暮らし方をしているわけではなく、同じ価値観を持っているわけでもない。実は田舎の付き合いが辛いと思っている地元民もいる。不愛想と思われたり、変人と目されたりすることを怖がらないほうがいいと思う。移住者が楽しげに面白そうなことをやっていると、意欲的な人は自然に集まってくる。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 移住者を受け入れる側に要望があれば教えてほしい。

<答え> 「村に住んだらこうするものだ」と、押し付けることを控えてほしい。例えば、村のお祭りに関していえば、都会からの移住者はお祭りというものに参加した経験のない方も多い。だから、珍しがって喜ぶ人もいれば、警戒する人もいる。もちろん、別の宗教を信じている人もいるはず。そういうひとたちを一律に「郷に入れば郷に従え」とばかりに無理に引き入れることはしないでほしい。文化が違うかもしれないということを考慮したうえで関わりをもってほしい。

その他、伝えたいこと

田舎暮らしをしたいと思った最も大きな理由は、田舎なら、自分の生活に必要なものができるだけ自分の手で作れると思ったから。味噌とパン作りに始まり、各種保存食作り、草木染めで古着の再生、昨年は醤油醸造も始めた。米作りではハザ掛けを手伝ったり、休耕田での麦作もおこなったりした。もちろん今も、生活のほとんどは人の手による品でまかなっているが、ささやかでも、自分で作れるということが楽しいし、生きる自信につながると思う。

写真 村田牧子さん
(アンティマキ)



草木染めした生地
(中央の黄色はカリヤス染め)



焼き菓子
(素敵なお宅の窓辺にて)

てくてく農園

調査団体名	: てくてく農園	団体代表者名	: 横江克也
設立年	: 2011(平成23)年	対応してくれた人の名前	: 横江克也・横江晴菜
団体URL	: http://www.hm.aitai.ne.jp/~yokoe/		
活動拠点	: 豊田市榊野町池田26-4	調査員	: 蔵治光一郎・大島光利・森本徳恵
取材日	: 2014年12月13日	レポート作成者	: 蔵治光一郎

活動内容

農地を借り、野菜をつくる。鶏を飼い、卵を産んでもらう。不定期にジャムをつくる。これらを自家消費し、余剰を知り合いに「おすそわけ」する。おすそわけの方法は、決まったお客さんへの宅配のほか、インターネットでの購入申し込みも受け付けている。宅配は豊田市、瀬戸市内は自分で配達し、それ以外は宅配送で。名古屋や東京にもお客さんがいる。決まったお客さんは20～30人ほど。生産量としてはこれが限界。収入としては少し足りないが、生活はできている。

キャッチフレーズ

おすそわけを食卓へ

会のモットー(何を大切にしているか)

生産、販売をするのではなく、あくまで、自分たちの暮らしの余剰分を、自分たちの暮らしを応援してくれる人に「おすそわけ」する。市場に出して、知らない人に売るのはすごく気をつかうこと。店頭に並べるのは大変。規格品は作りたくないし、作ることができない。

設立から現在に至るまで変化したこと

基本は変わっていない。お客さんが20～30人になるまで、最初は口コミ、知り合いに分けていた。イベントに出展して宅配を募集し、お客さんが増えていった。野菜を先に始めたが、野菜は自分で作っている人も多い。卵は自分で作っている人は少なく、こだわりの卵を食べたいという人も多かったようで、増えていった。最近では、お客さんの顔が浮かぶようになり、こちらの思いだけではなく、お客さんのことを考えながら作るようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

農協、スーパー、市の販売所とは連携していない。行政からは青年就農の補助金、耕作放棄地を再生する補助金、電柵の補助金などをいただいた。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

自分たちの生活で精いっぱいだが、消防団に入ったので、同じ世代で外から入ってきた人たちや、地元の若者とは知り合いになった。地域のお祭りに参加し、太鼓を習い、門松を作るなど、もともと好きだったので苦にならず楽しめた。草刈をするとありがたがられた。結果として、ほとんどの日曜日に予定が入っている。

現在直面している課題

提供できる量を増やしたいが、一人でやれることには限りがある。卵は好評だが、3～5月が旬で、1日90個ほど産む。その時はおすそ分けできる人が増えるが、それ以外の季節では1日20個ほどになり、欲しいという人に分けてあげられない。鶏は現在約100羽。もう少し増やしたい。

今後やってみたいこと

研修生の受け入れ。自分たちのような暮らしをしたい人を受け入れたい。
ヤギを飼ってみたい。やってみたことがあるが、草の好き嫌いがあってきれいにはならなかった。
知り合いの農家さんとお互いに手伝い合いたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

研修生が1年限りで住める場所(ゲストハウスのようなもの)があるとよい。研修生に給料は払えないので、行政の事業で給料を払ってくれる制度があるといい。そのような制度はすでにあり、14万とか20万とかいった給料が払われるようだが、払い過ぎではないか、感覚がおかしくなってしまうのではないかと思う。

チームオリジナルの質問 1

<質問内容> 地域に、どういう受入体制があれば、外からの人が、もっと入りやすいと思いますか。

<答え> 四国の研修センターにいて、暮らす場所を探していたとき、豊田市に空き家バンク制度があったのがとてもよかった。売り家でなく、借りられること、行政が間に入ってくれ、採算度外視であること(不動産業者との違い)、1日に何軒も見回れたこと。豊田の中でも旭の物件が多かったので活発な地域だと思い、旭を選んだ。農業については自分で農地を探した。技術は研修で学んでいたの、行政や農協の仲介はない方がむしろよかったが、ゼロから始める人に対しては研修先、面倒を見てくれる人がいた方が入りやすいだろう。

チームオリジナルの質問 2

<質問内容> お子さんが生まれた後の生活は。

<答え> 「みんなで子育て」。地域のお役(草刈、神社の掃除、祭りの際の太鼓や笛、門松作り、お楽しみBBQなど)に参加すると、自然と地域の子供になる。抱っこする人が交代で面倒をみってくれる。子供が少し大きくなれば、一緒に太鼓の練習をしたり、門松を作ったり、料理を手伝ったり。また、近所で田植えなどあれば、子供も一緒に田植え(泥遊び?)を手伝ったり。地域内で母親と子供が孤立しない。緊急時には、子供の面倒を見てくれる人が近くにいることは、ものすごい安心。母乳、布おむつで乗り切るつもり。小児科の病院は、大きなところは足助にあるが、近くにないか探している。子供が小学生になったときに地域の小学校(敷島小)がまだあるかどうか心配。農作業のマンパワーは、子育ての分、減ってしまうことになるので、お手伝いの方がいてくれれば助かる。子供が生まれることをきっかけに、やり方を変えた方がいいかもしれないと考え中。

写真



ご自宅での取材の様子



てくてくたまごはこの箱に入れて提供されます。中には「てくてく卵のひみつ」として①国産飼料100%②平飼い飼育③抗生物質不使用についての説明が書かれています。さらに「豆知識」として、「黄身の色は食べているものの色」として、てくてく卵の鶏のごはんはお米が中心なので、黄身が薄い黄色(とうもろこしやパプリカなど赤や黄色の強いものを食べると黄身がオレンジ色になる)で、昔庭先で飼っていた頃の卵はこんな色だったかもしれません、と書かれています。

あさひ若者会

調査団体名 : あさひ若者会
 設立年 : 2013(平成25年)年
 団体URL : <http://asahidosokai.jimdo.com/> あさひ若者会とは/
 活動拠点 : 豊田市小渡町15-1
 取材日 : 2014年12月11日

団体代表者名 : 鈴木啓佑
 対応してくれた人の名前 : 鈴木啓佑、戸田友介、中垣 隆
 調査員 : 蔵治光一郎、森本徳恵、大島光利
 レポート作成者 : 大島光利

活動内容

旭地区の未来のために力になりたい地域の若者、Uターンした若者が集まり発足。いろいろな取り組みをする中で関わる人とのつながりを増やし、地域の課題解決のために実践できる若者の人材育成が主目的。現在のおもな活動としては、自分たちがまず旭のことをもっと知るために旭の今と昔を古老に学ぶ「ふるさと探訪フィールドワーク」。旭で頑張っている若者、嫁、事業主や旭の歴史など、知っているようで知らなかった旭の魅力に焦点を当て紹介する機関誌「シトルカン」の発刊。旭に縁のある全ての人のために開催される集いの場づくり「あさひ同想会」など。

キャッチフレーズ

みつめなおそう旭の魅力 ほんとに旭を『シトルカン』(発行しているフリーペーパーのタイトル)

会のモットー(何を大切にしているか)

メンバーの主体性を大切にしているいろいろなアイデアを引き出し、それを仲間のバックアップによって実現させることができるような場づくり。
 いろいろな取り組みをする中で関わる人とのつながりを増やす。そして関わることで地域の課題を徐々に自分事にし、課題解決のための実践者を増やすことのできる場づくり。
 気をつけていることは、Uターン増加はあくまで結果であり、決して目的としないということ。目的にしまうと、様々な事情で旭を出て行かなければならなかった若者が悪者になってしまう恐れがある。どんな状況であれ旭の仲間に変わりはない。

設立から現在に至るまで変化したこと

2012年、旭のために何かしたい有志グループにより「第1回あさひ同想会」を企画。そのグループが母体となり2013年より地域予算提案事業として「Uターン・親密別居者促進事業『あさひ若者会』」が設立された。設立より月一度の会合でのディスカッションを重ねることにより、少しずつふるさとに対する想いやビジョンなどが共有されてきているように感じている。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田市旭支所(事務局)、旭地域会議

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

旭のまちづくりに関わる担い手人材育成が活動の主目的。「ふるさと探訪フィールドワーク」、「シトルカン」の発行、「あさひ同想会」の企画など、いろいろな活動を通して、徐々に郷土の課題を自分事にし課題解決のために自ら実践することの出来る若者を増やしたい。

現在直面している課題

特になし。メンバーそれぞれが主体的に関わりながら話し合いの中で生まれたものは全てが正解。想定外の結果も貴重な学びとしている。

今後やってみたいこと

みんながやりたい事業をバックアップできる体制づくりの強化。(鈴木)
老人福祉施設めぐりの里などと連携した旭の情報満載の日めくり帳の作成。(戸田)
旭町人全員集まる大イベント「3,000人集合3,000人顔つなぎ」大懇親会を実現する！(中垣)

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

世代を超えた連携体勢をつくりたい。特に地域活動の中心となっている60代、70代の方々の理解と協力が必要。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞若い女性の参加、奥様方はどのように参加しているのか教えてほしい。
＜答え＞若い女性の参加は2名と少ない。しかし、他では女性によるお茶会やバンドをやってる小さなグループがあったり、こども園、小学校、子ども会等で子どもを介しての仲間づくりが行われている。そういったコミュニティと連携していきたい。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞旭に移住してきてからの仲間づくりはどのようにされましたか。(戸田氏に対して)
＜答え＞消防団に入り活動する中で仲間がどんどん増え旭が好きになった、旭を若者で何とかしようと「あさひ若者会」の設立に参加した。今後は「あさひ若者会」でもいろいろな活動をする中で、結果として移住や地元若者のUターン促進にも貢献できるとよい。ただ人口が増えればいいではなく、旭を元気にするために一緒に活動してくれる若者の受入れを積極的に行っていきたい。

その他、伝えたいこと

仲間で、あーでもない、こーでもないと話し合い、考えたり行動したりしていることに気づき、心地よいと思うように変化をしてきた。「いつでも帰ってきやすいように」、「いつでも新しく移住してきやすいように」、「子供たちが自分の夢に向かいながらもこの旭に住み続けれるように」、「年を重ねながら旭で住み続けれるように」。焦らず様々な取り組みに挑戦して実現したい。

写真



豊田市旭支所での取材の様子
右 会長 鈴木啓佑さん
中央 戸田友介さん
左 副会長 中垣隆さん



ワークショップによる会議



機関誌「シットルカン」

あすけ里山ユースホステル

調査団体名	あすけ里山ユースホステル	団体代表者名	小川光夫
設立年	1998(平成10)年5月	対応してくれた人の名前	小川光夫
団体URL	http://www.ne.jp/asahi/asuke/satoyamayh/		
活動拠点	豊田市椿立町坂27-2	調査員	蜂須賀功、浜口美穂
取材日	2014年12月5日	レポート作成者	浜口美穂

活動内容

●都会から田舎への軌跡

名古屋市在住だった30数年前、ユースホステルを利用して旅をしている間に田舎の良さ、豊かさ、自然の素晴らしさを知り、27年くらい前に愛知県にある村に移住する。

その後、足助町に移住。閉校になった椿立小学校を平成10年に借りて「あすけ里山ユースホステル」と「貸農園」を始める。

●ユースホステル(YH)の企画・運営・協力活動

① イベント…四季折々いろいろなイベントを独自に催したり、豊田市、恵那市、根羽村などにある名所や温泉、観光地を紹介したりしている。

・自然観察…星見会、ホテル観賞、香嵐溪の紅葉ライトアップ見学、休耕田ビオトープでトンボ・メダカ・カエルの観察会など。

・地域のイベント案内ツアー…中馬のおひなさん、たんころりん、綾渡の夜念仏と盆踊り、平勝寺で除夜の鐘つきとお年越しなど宿泊者と一緒に行き案内をする。

・手ノコで行う間伐のお手伝い…地主さんによる伐倒の指導や間伐の必要性の話などを通して参加者との交流を深める。

・紙すき体験、藍染め・草木染め体験など。

② 貸農園…都市部の人たちの畑作業を通じた憩いの場となっている。

③ とよた都市農山村交流ネットワーク足助地域会の人たちと共にセカンドスクール(豊田市内の小学生の田舎体験・自然体験)の受け入れ。

④ NPO法人 共存の森ネットワーク(東海地区の大学生・高校生)の受け入れ。

●個人的活動

①「椿立里山クラブ」

近所の休耕田を借りて「休耕田ビオトープ」の維持・管理を都市部の人たちと一緒にやっている。ビオトープに棲んでいるトンボ・カエル・水生昆虫・植物などの観察も。宿泊したお客さんや子どもたちにも観察や泥んこ体験をしてもらっている。

②「足助YH自然観察会」

基本的に旧足助町地内に限定して観察会を行っている。メンバーは5人、市内の森林インストラクターの方が先生。2013年に「足助の自然を歩く」という冊子を発刊。

キャッチフレーズ

宿泊客と地域の架け橋に

会のモットー(何を大切にしているか)

何気ない山里の自然や文化を大切に思っている。

設立から現在に至るまで変化したこと

開所当初は旅好きなYH会員が主な客層であったが、自然観察などイベントを行って年を経るにつれ、一般のお客さんも増えてきた。特に小さい子どもがいるグループやご家族の利用が増えた。

また、矢森協や森林学校を通して間伐ボランティアの人たちとも親交が深まってきた。

連携している団体・専門家・自治体など

日本ユースホステル協会、矢作川水系森林ボランティア協議会（矢森協）、足助きこり塾、とよた森林学校、とよた都市農山村交流ネットワーク、豊田市、三州足助屋敷、NPO法人共存の森ネットワークなど

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、山村・森林資源活用など）

椿立自治区では数年前より共存の森ネットワークの学生たちの受け入れを行っている。愛知・静岡・岐阜・三重の大学、高校生が参加している。地元のおじいちゃん、おばあちゃんから今までの生活や仕事などの聞き書きをしながら学び、自分たちはこの集落とどう関わっていくかを考えている。

現在、環境問題の取り組みとして、漆畑町で若者を含む地元の人たちと共に、荒れた竹林の整備を実施。その竹の利用方法として試験的に野焼きで竹炭を作るなど、研究熱心に取り組んでいる。参加人数も増え、地元の若い人たちと共に、今後さらなる地域活性化のアイデアが出てくるものと期待されている。

現在直面している課題

- ・ユースホステル会員の減少。
- ・里山クラブ・観察会メンバーが高齢化している。
- ・農園やビオトープがイノシシやシカによる被害を受け、修復作業に苦労している。

今後やってみたいこと

- ・足助より車で1時間くらいの範囲内にある、ガイドブックに載っていない地元しか知らない名所、温泉、お店の紹介。
- ・山里の自然や文化に興味のある外国人旅行者の集客。
- ・新規イベントの企画。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・愛知県、豊田市、恵那市、根羽村など近隣市町村の観光情報収集。
- ・英文観光資料を作るための英語翻訳をしてくれる人。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 様々な体験イベントを企画されていますが、そのきっかけは何？

<答え>

田舎暮らしを始めた時、そこに暮らす人々のいろいろな手仕事や山仕事などの技術や、それに伴う知恵の素晴らしさに感動した。自分自身でできることは少ないが、いろいろな人に協力をしてもらいながら、それを宿泊者に体験を通して伝えることができたらいいなと思うようになったから。これは、田舎だからこそできることだと思う。

その他、伝えたいこと

閉校した校舎を活用した「あすけ里山ユースホステル」の部屋の名称は、学区内の地域の名前になっている。廊下には当時の鏡や子どもたちが描いた絵も残り、フロントには校歌が額に入って飾られている。また、談話室には「椿立小学校誌」「椿立家族ものがたり」などの地域資料も。これらが地域のことを話すきっかけになっている。昔は地域の人をつないでいた学校が、今はユースになり、外の人と地域の人をつなげるようになった。



校舎を活用したあすけ里山ユースホステルの外観



談話室にて



間伐のお手伝い



共存の森ー竹林整備



セカンドスクール
足助地域会メンバーと共に



ビオトープで生きもの探し



校庭が子どもたちの遊び場に



草木染め体験

新盛里山耕流塾

調査団体名	新盛里山耕流塾	団体代表者名	鈴木 智
設立年	2008(平成20)年4月	対応してくれた人の名前	鈴木 智
団体URL	http://sinmori.exblog.jp/		
活動拠点	豊田市新盛町(すげの里)	調査員	浜口美穂、蜂須賀功
取材日	2014年12月13日	レポート作成者	蜂須賀功

活動内容

「子どもの頃にあった美しい里山にしたい！次世代を担う子どもたちや孫たちに引き継ぎたい！」という想いから新盛里山耕流塾は始まる。耕流塾の「耕」は、里山の再生と人材交流(人の発掘)の2つの意味がある。耕流塾の経緯と現在の活動内容は次のとおり。

●裏山(ら)しい暮らしの会(平成18年4月)

手入れがされなくなり荒れてしまった裏山を再生しようと、新盛自治区の活動として「あすけ新盛裏山塾活動」がスタートする。(新盛里山耕流塾の前身と言える活動)

●新盛里山耕流塾がスタート(平成20年4月)

地元住民を主体とする実行委員会を発足。地元住民が講師となり、都市住民との共同作業により、年間をとおして里山の魅力を体感できる耕流塾を開耕する。豊田市との共同事業。

●豊田市里山くらし体験館「すげの里」のオープン(平成23年5月)

豊田市足助支所が有識者と地元住民で構成される里山耕検討委員会を設置し、21世紀の新しい里山づくりと暮らしの実現を図るための里山と都市との交流(耕流)プログラムと拠点施設の検討を行い、その拠点施設として「すげの里」がオープンする。

●平成25年度の耕流プログラム

- ・旬裁食講座(11回)
- ・もりの里☆市民農園(田11区画、畑15区画)
- ・そばづくり講座(7回)
- ・トヨタ自動車労働組合農業体験講座(10回)
- ・そば打ち体験(3回)
- ・石窯活用講座(7回)
- ・山遊びコース(4回)
- ・その他の講座(ホテル観賞会、さつまいも植え、芋ほり体験、もちつき大会など)

キャッチフレーズ

エコでおしゃれな 21世紀の里山暮らし

会のモットー(何を大切にしているか)

田舎の風景はどこも同じで、やっていることも同じだと思う。ここがいいと言ってくれる人は、その地域の人に惹かれてここにくると思う。「人とのつながり」を大切にしていきたい。

また、塾の運営に際しては、あまり無理をせず、ちょっとだけ無理をするように心がけている。その分だけ前進する。

設立から現在に至るまで変化したこと

●人との交流の楽しさ、大切さを知った。

設立当初は里山を再生できればいいと考えていたが、活動を通じて人々との交流の楽しさ、大切さ、奥深さがわかった。場所を整備しても、もう一度来たい、もう一度あの人に会いたい、あそこに行けばあの人に会えることが大事である。

●塾以外の地域の人の意識が変わった。(相乗効果があった)

最初は自治区の活動として立ち上げたが、地域の人になかなか理解してもらえなかった。塾の活動を重ね、耕作放棄地が田んぼになり、里山が徐々に再生されてくると、活動場所の隣の人にも自ら耕作したり、間伐するなど、塾以外の地域の人々がやる気になり、意識が変わってきた。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田市、トヨタ自動車労働組合、千年ゼミ

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

●耕作放棄地が美しい田畑に(耕作放棄地の解消)

耕作放棄地を市民農園として使用したことにより、市民農園の周りの土地所有者も耕作をするようになり、耕作放棄地の割合が80%から30%に激減した。(30%分は一人の都市在住者の所有で、現在、借りて再生する話を進行中)

●定住者が増加

耕流塾をきっかけにUターン(都市部からの移住者)が4世帯ある。Uターンの世帯もあり、新盛地区では人口が増加し、子どもたちの元気な声がいつでも聞こえるようになった。Uターンの人は、もともと田舎での暮らしに関心があったかもしれないが、耕流塾により目覚めたのかもしれない。あるUターンの方から「私はあなた(鈴木代表)がいるからここに来ました」と言われた時はうれしかった。日本中、里山の風景はどこでも同じかもしれないが、そこにいる「人」に導かれてくることがわかった。これからも、人と人のつながり、出会いを大切にしていきたい。

現在直面している課題

塾の中心メンバーの年齢は60歳以上がほとんどで、若いメンバーがあまりいない。

今後やってみたいこと

あまりに忙しくて今後のことを考える余裕がなく、ちょっと息切れしている感じである。今後は講座数を減らして、中身を濃いものにしていきたい。

将来は、耕流塾なしでも、地域がやっていける仕組みになることが一番理想である。現在はその手段が見つからないから耕流塾をやっている。もし、耕流塾以外に良い手段が見つければ、耕流塾はいつやめてもいい。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 行政(豊田市)との関係は?

<答え>

●負担金をもらっている。

耕流塾の講座は、豊田市との協働事業である。講座参加者からは会費をいただいているが、それだけではやっていけないので、豊田市から負担金をいただいて運営している。本当は、会費だけで賄いたいのが現状である。

●人としてつきあう。

行政担当者は数年で代わるが、どの人も始めはかたいが、付き合っていくうちに丸くなっていく。担当を離れても耕流塾に来てくれる人もあり、やはり、人としてお互いを認め合いながら、真剣に付き合うことが大切である。私は、行政担当者だけでなく、耕流塾参加者全員、大人から子供までみんなと真剣に付き合っている。

その他、取材者から伝えたいこと

●無いものは自分で作る。

すげの里近くの水路にある小水力発電機、バイオガス装置、ちょっとした建屋など既製品でない物は、どんどん耕流塾のメンバーで作っています。

●すげの里はすげえエコです。

すげの里は、自給自足によるかつての里山暮らしを参考に、エコで自然にやさしい循環型の暮らしを意図して、薪ボイラーや薪ストーブ、太陽光発電などを導入しています。里山暮らしの知恵と技を学び、交流や研修の場として活用でき、会議室、調理室のほか囲炉裏のある談話室や簡易宿泊部屋もあります。

●近くにおしゃれなカフェ

活動拠点施設「すげの里」の近くに、おしゃれなカフェ(ganga)がある。木曜日から日曜日、朝9時から夕方5時半まで営業している。鈴木代表の奥さまが作っています。ランチもあり、是非お立ち寄りを！おすすめです。



薪ストーブの前での取材の様子



石窯活用講座の様子



バイオガス装置の説明をする鈴木さん



すげの里



移動式の石窯と薪ボイラー



カフェ ganga

近藤しいたけ園

調査団体名	: 近藤しいたけ園	団体代表者名	: 近藤圭太
設立年	: 2011(平成23)年	対応してくれた人の名前	: 近藤圭太
団体URL	: http://kondoshiitake.blog.jp/	調査員	: 浜口美穂、蜂須賀功
活動拠点	: 豊田市和合町(下山地区)	レポート作成者	: 蜂須賀功
取材日	: 2014年12月5日		

活動内容

国内で多くの農家が菌床によるハウスで椎茸を栽培しているが、近藤しいたけ園では昔ながらの「味」にこだわり、原木による椎茸を実家の山で栽培している。菌床栽培では4、5ヶ月で収穫できるところ、近藤しいたけ園は原木での栽培により1年半から2年かけてじっくり育て、より自然に近い椎茸を栽培する。しかもそのホダ木(菌をつける原木)は、実家の山や地元の共有林から自ら切り出し調達している。ホダ木から作っているところは全国的に見ても珍しいケース。老木は切っても萌芽更新(切株から芽が出る)しないため、コナラを植林している。その結果、健全な森づくりにもつながり、生物多様性にも貢献している。

年間15万駒の植菌を行い、栽培、収穫、販売すべてを一人で行っている。乾燥椎茸も製造。生椎茸はその日に採れたものをその日に届けることを基本に、産直プラザなどの直売所で委託販売するほか、ファーマーズマーケットなどで直接販売をしている。また、(株)あいのう流通センターに卸売りもしている。

キャッチフレーズ

地産地商(地元で作って地元で売る。)

会のモットー(何を大切にしているか)

「自然に逆らわず、自然の流れの中で育てたい」をモットーに、味、安心、安全を消費者に届ける。

設立から現在に至るまで変化したこと

設立後3年かけて20種以上の椎茸の種菌を栽培し、環境にあった、収穫が多く、おいしい椎茸の栽培を試みる。また、月4回のファーマーズマーケットに出店し、対面による直接販売を行い、お客さんと会話し、お客さんの反応を見ながら、味、価格設定を決めている。

連携している団体・専門家・自治体など

(株)あいのう流通センター、直売所(JAあいち豊田直売所、下山の里、山遊里、小久井農場)、商工会

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

採れた椎茸を豊田、岡崎など地元で売ることにこだわっている。おいしいものをおいしい状態で地元の人に食べてもらいたい。(インターネット等を通じて都会への販売は考えていない)

また、ホダ木を採取するため実家の山で木を切った後、その場所に次のホダ木として使えるよう植林している。原木は椎茸栽培者にとって、農業者の「畑」と同じである。椎茸栽培が持続可能になるよう、山を大切に守っていききたい。

現在直面している課題

原木での栽培は、収量が増えないし、時間がかかることが課題である。

また、近年獣害による被害が多くなった。イノシシ、シカは柵を設置することで防げるが、サルには効果があまりないことがわかった。そこで昨年、サル対策として「モンキーダッグ」を飼い始めた。しいたけ園内を犬が散歩することで、サルが警戒するようになり、被害を防ぐことにつながる。

今後やってみたいこと

今後もしいたけ園を続けていきたいし、できれば、椎茸を基本に、加工にもチャレンジして、6次産業化にも挑戦してみたい。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞しいたけ園を始めることになった経緯は？

＜答え＞

●子どもの頃の原体験

お父さんが森林組合に勤める傍ら、椎茸を栽培していた。山の仕事や椎茸栽培を手伝ったり、遊んだりして、楽しい思い出がある。

●大学時代の椎茸栽培

夏休みを利用し、自分で椎茸を栽培して出荷したところ、他のアルバイトをするよりもお金を稼ぐことができた。また、自然の中で仕事することや自分が作ったものを買ってくれる喜びを感じた。

●脱サラし、農業研修

将来、自分で何か仕事をしてみたいと思っていたが、まずは信用金庫で金の流れを勉強し、脱サラする。その後、豊田市の地域農業後継者育成事業に応募し、矢作川自給村稲穂の里（小原農地管理センター）で農業技術を学ぶ。そこで、有機農業、流通などについて研修を受ける。研修を受ける前は直売所をやりたいと思っていたが、研修を受けて、やっぱり自分で農業をしないとと思い直し、2011年に近藤しいたけ園を設立し、現在にいたる。

写真



コナラの木と近藤さん



原木(太い)での栽培



原木(枝先まで余すことなく使うので細い)での栽培



モンキードッグの空太(くうた)くん

こいけやクリエイト

調査団体名 : 株式会社こいけやクリエイト 団体代表者名 : 西村 新
 設立年月 : 2011(平成23)年8月 対応してくれた人の名前 : 西村 新
 団体URL : www.koikeya-create.com
 活動拠点 : 豊田市全域・根羽村 調査員 : 近藤 朗、眞柄明洋、高橋伸夫
 取材日 : 2014年 11月25日 レポート作成者 : 高橋伸夫

活動内容

メンバーは6名。夫婦(デザイナー)+スタッフ3名(デザイナー)+母(「耕Life」の配達担当) [写真はカメラマンに委託]
 各種印刷物のデザインや作成とホームページの企画・製作・運営などを生業としながら、フリーペーパー「耕Life」を
 年に4回発行することで、皆さんに「農」・「食」・「暮らし」・「環境」に目を向けてもらい、自分の人生を耕してもらいたい。
 無理なく自分達のペースで活動することを心掛けており、取材活動の範囲も豊田市と根羽村程度に留めている。

キャッチフレーズ

デザインで人と人をつなぐ。
 (ちなみに西村代表の正装はツナギです)

会のモットー(何を大切にしているか)

人生を耕す・地産地消・地域で顔の見える関係性を築くこと

設立から現在に至るまで変化したこと

個人経営のデザイン会社として設立したが、人手が足りなくなって翌年法人化した。
 「耕Life」は2012年10月に発行したが、当初予定の3,000部はすぐに無くなり増刷。現在の発行部数は11,000部(2014
 年冬号)。日本タウン誌・フリーペーパー対象2014のライフスタイルコンテンツ部門最優秀賞、読者投票部門全国5位
 受賞。

連携している団体・専門家・自治体など

アグロ・プエルタ(広報として立ち上げに参加)、千年委員会の山本シゲさん、株式会社M-easyの戸田さん、
 一般社団法人物々交換局 など。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

フリーペーパー「耕Life」の発行。
 豊橋市のセミナーで農産物のデザインについて講演を行った。

現在直面している課題

「耕Life」の印刷・製本費用は広告・協賛・耕縁会(後援会)からの収入で賄えるが、人件費分は持ち出しである。ただ
 し「耕Life」の読者から仕事の依頼が入ることもあるので課題ではない。
 人と人のつながりということを含め、現時点で大きな課題は無い。

今後やってみたいこと

- ・ お金が溜ったら、現在会社がある場所に人が集まるカフェを開店したい。
- ・ 他の地域で「耕Life」のようなフリーペーパーを発行したい人があれば支援したい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

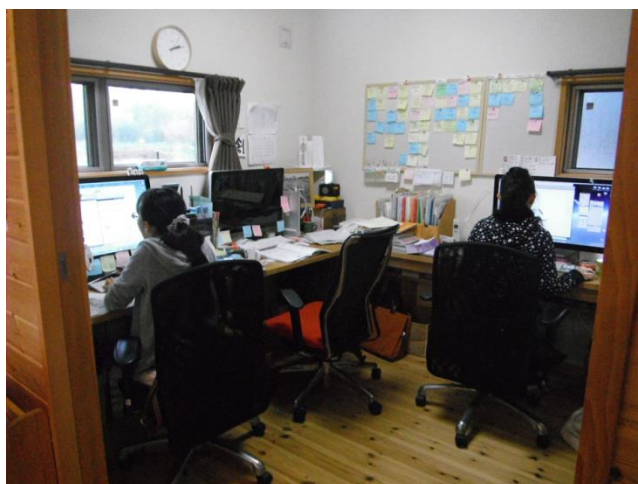
新しい人脈や情報も必要だがとりあえずは現状の情報・人脈の中で活動したい。
必要なものといえばカフェを作るお金？

チームオリジナルの質問

<質問内容> 地元で開業・活動されておられるが、豊田市以外の場所であったとしても順調にできたと思いますか？

<答え> 他の地方のことについては考えたことがないので分からないが、豊田市は開業・活動する環境が整っていると思う。豊田市は巨大企業のお膝元で関連企業も多いが、当社に大きな企業の仕事はほとんど入らない。逆に大企業の仕事を扱う規模の大きな会社では採算が合わない仕事があるので、その部分で仕事を得られている。豊田市は我々のような活動には大変都合が良く、「耕Life」の配布置き場300箇所の中で250箇所が豊田市の店舗や施設であり、ありがたいと思っている。

写真



アグロ・プエルタ

調査団体名	: アグロ・プエルタ	団体代表者名	: 藤本浩幸
設立年	: 2012(平成24)年	対応してくれた人の名前	: 藤本浩幸
団体URL	: http://agropuerya.booo-log.com		
活動拠点	: 豊田市全域	調査員	: 高橋伸夫、眞柄明洋
取材日	: 2014年11月25日	レポート作成者	: 眞柄明洋

活動内容

農業サークル「アグロ・プエルタ」のメンバーは、普段は別に仕事を持って活動しています。農をツールに、食や暮らしのあり方を考えるきっかけをつくり、持続可能な自立した地域社会の創造に寄与することを目的に、現在は20代から30代の会員等(親と子を対象として)にフェイスブックを利用して、農に係わるイベントを豊田市内で年間を通じて定期的に企画・案内し、○農と食をテーマとした交流・対話の場づくり、○農と食のあり方(安全な食とその確保)を題材にした問題提起、解決策の模索及びその実践を行っています。

キャッチフレーズ

アグロ・プエルタは、農や自然を楽しみながら、食や暮らしのあり方を見つめなおすきっかけになる場があったらいいな—という思いから生まれた団体です。BBQや野菜作りをとおして、とにかくみんなで笑顔で楽しむ。

会のモットー(何を大切にしているか)

子供達が畑(自然)の中で遊んでいないので「虫がきらい」などの問題に対して順応性を高めるために、昔のように畑や田んぼを使って多いに遊んでもらい、そこで収穫した安全な野菜などを味わって欲しい。

設立から現在に至るまで変化したこと

野菜づくりに興味があり、無農薬の奈良県の農場で研修して民間資格を取得して、仲間をつのりこの活動に入った。豊田地域の人や農業に係わる団体の方と繋がりができるなか、益々農業にはまっています。

連携している団体・専門家・自治体など

千年委員会、スローライフセンター、豊田東高校、矢作川研究所など。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

活動の一例として、年間を通じた米づくりの「こめっこクラブ」を毎年行い、6月の親子での田植えにはじまり、草取り、稲刈り、11月の収穫祭まで行い、その苦労や楽しさ、収穫の喜びを体験することや、豊田市旭地区の農園とタイアップしたイベントも行っています。

現在直面している課題

今まで20代～30代の親子を対象にしてきましたが、より地域の皆様と連携するために、幅広い層の参加を頂くことが必要と考えており、そのやり方を模索しています。

今後やってみたいこと

畑で育った野菜に触れ合うことを目的として、畑の近隣の幼稚園やこども園の園児と、会員メンバーが育てた「さつまいも」の「いも掘り体験」やそれを食べる「いも掘り大会」を行ってみたい。

今後の活動について

矢作川流域圏懇談会に関係する団体の方から、活動についての助言等を頂いている。
また、当会のブレーンに、豊田市以外の学識者や行政に精通した人もいるので、これらのメンバーと議論しながら活動の向上に努めています。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 夏場のイベントはどのようなことを行っていますか。

<答え> 豊田市の花火大会の日に、子供たちに畑を開放し、日中は野菜の収穫等を行ってもらい、その後参加者でBBQをしながら花火を見学する企画を行っています。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 現在の活動対象が若い親子の方ようですが、今後のどのように？

<答え> 野菜を育てている畑の横には、遊歩道があり、近所のお年寄りのなかにはこの畑やイベントに興味を持っている方もあります。お年寄りとその孫(子供)というような方も参加して頂ける企画ができないか考えています。

その他、伝えたいこと

サークル名の「アグロ・プエルタ」は、スペイン語からの造語で「農への」+「扉」=「農への扉」という意味です。
名付け親は、このサークルを立ち上げる時に係わって頂いた、矢作川研究所の洲崎さんです。

また、活動している畑には休憩する場所(東屋等)がありません。
このため、山の地域の方から間伐材を提供頂き、会員で東屋等を建てることを企画しています。 ご協力をお願いします。

写真



右が代表の藤本さん

とよたプレーパークの会

調査団体名 : とよたプレーパークの会
 設立年 : 2004(平成16)年9月
 団体URL : <http://toyotapp.exblog.jp/>
 活動拠点 : 豊田市鞍ヶ池公園
 取材日 : 2014年11月22日

団体代表者名 : 小黑敦子
 対応してくれた人の名前 : 小黑敦子
 調査員 : 近藤 朗、真柄明洋
 レポート作成者 : 近藤 朗

活動内容

プレーパークとは、従来型の公園、既成の遊具によるお仕着せの遊び場ではなく、子ども達の想像力により遊びを生み出す事のできる「子どもが主役の公園」である(デンマークが発祥と言われる)。子供たちのためにも、こんな遊び場が欲しいと思った豊田市のお母さんたちが、「ないなら作っちゃおう!」と勉強し、さらに仲間づくりをしながらプレーパークを開催した。幾多の変遷を経て、現在は豊田市鞍ヶ池公園の一角で1ヶ月に2~4回の冒険遊び場を開催している。

(調査員が訪れたのもこの活動日で、公園の中の坂道を上がったわかりづらい場所であったが、きわめて魅力的な秘密基地の様相で、一見放置状態のように見える子どもたちの歓声が飛び交っていた。)
 活動としては他に定期的会合や講演会を実施、地域にプレーパークを作りたいという人たちへの支援も展開している。

●**創生期** …お散歩サークル「おひさまクラブ」(H15年~ 現在も活動中)の小さい子を持つお母さん8人達でH16年「とよたプレーパークの会」発足、H17年3月に高橋交流館で初開催、H17~20年は寺部町守綱寺裏庭で定期開催。共感し共に活動する仲間づくりが重要な時期であった。

●**鞍ヶ池公園時代** … 鞍ヶ池公園再整備計画の一環で豊田市公園課から話がありH20年春に移転。H21年4月からは市の委託事業として定期開催することとなり現在に至る。子ども達だけでなく、お父さんも参加できる、お母さんもイキイキできるプレーパークが定着した。

●**これから** … 子どもたちはどんどん大きくなっていくが、設立時メンバーの小黑さんが現在も代表として活躍。プレーパークには「卒業がない」と言う。課題として公園側の事情から、H27年4月には慣れ親しんだ現在の場所から同園内の植物園付近に移転しなければならず、奮闘中である。

キャッチフレーズ

子どもたちがちゃんと失敗することのできる場所をあげよう! ~人の「生きていく力」を育む遊育~

- ・ 怪我と弁当は自分持ち
- ・ 心が折れるくらいなら、骨折った方がいいよ

会のモットー(何を大切にしているか)

- プレーパークは「オープンである」 … 誰でも、その場で参加できる
- プレーパークには「禁止事項がない」 … むろんトラブルやケンカ、悩みや戦いもある。何かあればその場で話し合いルールを決めることとしている(解決力育成)。ここでは、子どもたちだけでなく親同士もよく話し合う。

設立から現在に至るまで変化したこと

- 当然の事ながら、年齢層が上がってきた。プレーパークには卒業がない。小さな子は少し大きな子に。運営する側をやってみたいという子も出てきた。新しい人たちも入ってくる。この会自体が成長していくということ。
- 豊田市内にも育児サークルがたくさん出来てきた。プレーパークから派生したものもある。ただ育児サークルは子どもが大きくなれば人は変わっていく。そういった意味で「卒業のない」プレーパークの会が育児系ネットワークの中で頼りにされている面がある。子育ての会、グループは人の繋がりの中で楽しく「ごちゃまぜ」になっていて、その中で役割を果たせたらいい。年3回程度、話し合う会を開催している。

連携している団体・専門家・自治体など

県内のプレーパークの会；てんぱくプレーパーク、にいのみ池（緑区）プレーパーク、その他
庄内緑地公園近くの団地内、知多市（そうり池）、東海市、三好市など

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

小黒敦子代表は現在、（豊田市企画政策部企画課）おいでん・さんそんセンターのコーディネートスタッフも務めているものの、とよたプレーパークの会が山村再生に関わっているわけではない。（鞍ヶ池公園は都市近郊に位置する）そもそも今回、この調査にプレーパークの会を対象としたのは、山村再生担い手育成の本質的な部分としての「人を育てる」活動を展開している団体だからである。

そういった意味で小黒さんから提示された

●与えられた既存のモノではなく、自ら考え想像力によって行動する力を養うこと

●決められた禁止事項によらず、問題発生時に話し合いながらルールを決める課題解決力、及び調停能力の育成

●プレーパークで主役となる子どもたちが大きくなり、次は面倒を見る側へと成長していく過程

さらに●プレーパークと育児サークルのメンバーがごちゃまぜに繋がって交流する（豊田市らしい）ネットワーク機能などが山村再生にも通じるキーワードだと感じた。

最も重要な点は、プレーパークでは、子どもたちだけでなく親たちにとってもお仕着せではない運営にやりがいを感じて積極的に取り組んでいる点。ある意味わずらわしい手法であり、役所だのみの都市的、効率的な教育とは正反対のものであるが、小黒さんは「このプレーパークがなかったら、うちの子はどうなっていたのだろうか？」とまで仰られた。

現在直面している課題

H27年4月の鞍ヶ池公園内での移転問題がある。プレーパークとしては現在地の方が適していると思うが、一般利用者にも使いやすいようにとの豊田市側からの要請である。現在、具体的な部分での話し合いが、うまくいっていない。

今後やってみたいこと

中高校生など大きな子たちの居場所づくりをしてみたい。

チームオリジナルの質問 【遊び場・公園についての対談】

【調査者（近藤）】私は現在県営公園の指定管理者として、（公共）公園とは一体何なのだろうかと考え続けていました。自分なりの結論として、広い意味での「人を育てる場所」だと思い至ったのです。このプレーパークを見て正に公園利用のあり方としても相応しいものだと感じます。これは、社会（地域）で子どもたちを育てることの公共性の高さを確信しているから。一方で、本来の公園管理者である行政が指定管理制度を導入したことから現場感覚が薄くなり、私たち現場の者とズレが生じています。プレーパークを市から受託されている立場として、どう思われますか？

【小黒代表】プレーパークをつくるにあたって、当初は豊田市の次世代育成課にしつこく相談、鞍ヶ池公園においては公園課とよく話をしながら進めて来ました。良好な関係を築いてきたと思います。この公園は指定管理ではなく市が直接管理していますが、しかしながら私たちとの関係については以前と比べて、随分とズレを感じるようになりました。4月に控える移転の話もそうですけれど、話が通じないこともありますね。当然の事ながら市の担当者も代わっていき、その度に何度も説明をすることは厭いませんが、予算も減り、大事な部分が引き継がれていけないのは哀しいですね。

【近藤】私は県から派遣されている立場でもあり、予算が削減されたり職員が減っていく現状は理解できます。でも、鞍ヶ池でのプレーパークはお母さんたちと市が二人三脚で進めてきたようですし、その理念的な部分が十分継承される仕組みが必要だと感じました。役所もコンパクトさを余儀なくされる中、次世代の人材育成が急務となっています。行政など組織も人が基本だとすれば、人を育て続けるプレーパーク的な社会は一つのお手本のような気がします。山村、だけでなく都市など地域の抱える課題についても同様かもしれません。

写真

鞍ヶ池公園プレーパーク



取材風景。右が代表の小黑さん

NPO法人矢作川森林塾

調査団体名 : NPO法人矢作川森林塾 団体代表者名 : 碓 伸夫
 設立年 : 2010(平成22)年4月設立 対応してくれた人の名前 : 碓 伸夫
 団体URL : facebookページNPO矢作川森林塾
 活動拠点 : 豊田市矢作川左岸・高橋～御立樋管間の高水敷 調査員 : 國村恵子、山本薫久、田中五月、村松憲吉
 取材日 : 201412月22日 レポート作成者 : 國村恵子

活動内容

矢作川の高橋(河口から40.4km地点)から豊田大橋、久澄橋を経て御立樋管(38.4km地点)までの左岸約2kmの高水敷で主に竹林伐採と河畔林再生の作業をしている。作業着手は2006年1月。その後の8年間、雨の日も風の日も黙々と竹を切り、なんと鬱蒼と茂った十万本の竹を切り終えた時、夢に描いた、堤防から輝く水面を見通せる清々しい景観が再生されていた。と同時に旧堤防と推測される所に、榎や藪椿などの潜在植生が切り払われた竹藪から解放され勢いよく枝葉を伸ばして修復された。

それは、見る人の心安らぐ美しい風景であり、豊田都心部においては貴重な都市林ともなった。まさに人の手で再生された命漲る河畔林である。取り戻された風景に馴染みつつ、現在では様々なイベントがこの場所で開かれている。復活した木本は他にオニグルミ、クワ、ヤナギ類と絶滅危惧種の草本のタコノアシなどで、それら在来種の生育を促す工夫を凝らし、訪れる人々が憩える木製ベンチも随所に作られている。豊田スタジアムのレストランからは矢作川の水辺が一望でき、市民にも広く認知され親しまれるようになった。

キャッチフレーズ

夢を共有する仲間歓迎。

会のモットー(何を大切にしているか)

豊田市の中心部に、人間が自然に溶け合い、自然と共生できる緑豊かな都市林(人間観察の森)を作る。メンバーの夢の共有による絆。上下関係や利害関係がなく、ひたすら黙々と作業し、同じ汗をかく事で繋がる人と人の輪。議論する事よりも汗をかく事で、あるがまま、さりげなく心が通じ合う優しい関係。

設立から現在に至るまで変化したこと

最初は土手から川面が見えなかった荒廃した河畔の竹藪の竹を切って、川面が見えるようにしたいということであった。作業が進んできて川面が見えるようになってくると、今度は竹藪の伐採跡から生えてくる実生のもで、日本ではあまり例を見ない河畔の都市林を夢見るようになった。そして、今ではこの林をさらに進化させて、人間と自然が溶け合って共生する状況を観察できる人間観察の森を目指している。

連携している団体・専門家・自治体など

国土交通省豊橋河川事務所とアダプト(協働管理協定)を2010年10月に結び官民協働活動へと進展した。豊田市矢作川研究所。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

愛知県立豊田東高校1年生に当塾の環境改善活動を講義(1時間)現場実習(2時間)まとめアドバイス(1時間)などを行っている。次世代が育ってくれること、この水辺と河畔林に触れ合った事を、ふるさとの風景の一コマとしてほしいと願いつつ。

現在直面している課題

竹林伐採後のメンテナンスは、在来種や自生種の実生から幼木を経て河畔林へと誘導する順応的管理を行っているため、長期的スパンで取り組める後継者の育成と組織体制。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

豊田市公園課、河川課との連携活動の強化。

今後やってみたいこと

ヒートアイランド対策を含めて、豊田都心部の緑化を進め、緑豊かな都市にしなければならない。例えば、中央公園構想を進めて、見直しを行い、森の中の豊田スタジアムにすることを考えるべきだと考えている。加茂川水門の魚道整備とガサガサ水辺の創出。魚道は木杭連結で落差勾配を緩やかに付け、ステップ・アンド・プールで水門下の水深があるプールから遡上可能とする図面も作成。

現地調査の感想

川は流れてこそ川。遮るもののない空間が広がる現地、堤防からも高水敷からも川面が見渡せる。「活動をしてこられて何が一番良かったですか」と尋ねると、柔和な笑顔で「この風景」とほほ笑みながら即答された。その言葉はかけがえのないものを得た人だからこそ、穏やかでも確信に満ちたものだった。本来なら終わりが見えない作業であるはずだが、「朝の清々しさに心惹かれて毎週、みんな来とるんですよ」と続けて言われた。その積み重ねが、この風景なのだと合点がいく。車を降りた時にオオタカが右岸上を飛び、カモ、カイツブリ、カワウが川面に浮いていた。タコノアシは冬枯れていても、やはりタコノアシである。ホオジロ、アオジが柳の枝に止まり、セグロセキレイが地面を歩いている。極め付けは豊田スタジアム前の河川敷上空を群れ飛ぶツバメ15羽。越冬燕だ。これが鬱蒼とした竹藪ならツバメは目視できない。我々の車が通ることで舞い上がった虫を採餌している。矢作川森林塾の活動が、都心部ではなかなかお目にかかれない水辺生態系再生・復権の一端を教えてくれた。来年の干支である未＝羊の顔に葉痕が似ているオニグルミの幼木小群落。オニグルミの実を埋めてある所に竹が立ててある。対岸の倒伏密生竹林との比較で、左岸作業区域の『再生した水辺と河畔林』の良さが一目で解る。夢のバトンを渡す後継者問題は、どの世界も同じだと頷いた。

* 現地取材の後、豊田市職員会館で、活動の様子をスライド上映しつつご説明頂いた。参加された方と共に意見交換した。都市林のあり方に話題が及び、「豊田市・緑の基本計画」での矢作川河畔林の位置付けや、都市緑化と都市林の今後の展望、街路樹枝打ちの問題などが話し合われた。

写真

集合写真
(前列右から
3番目が碓さん)



河畔林の次世代の
主役になる稚樹の
調査



作業風景
(伐竹)



作業風景
(草刈り)



矢作川水族館

調査団体名 : 矢作川水族館 団体代表者名 : 阿部夏丸
 設立年 : 2007 (平成19) 年 対応してくれた人の名前 : 阿部夏丸
 団体URL : <http://www.yahagi-aqua.com/index.htm>
 活動拠点 : 家下川、矢作川 調査員 : 田中五月・山本薫久・國村恵子・村松憲吉
 取材日 : 2014年12月8日 レポート作成者 : 田中五月

活動内容

魚類調査、外来生物駆除なども行うが、市民参加の川遊びイベントを毎年おこなっている。
 ・矢作川たんけん隊(泳いだり、潜ったり、流れたり。捕った魚はその場で食べる)
 ・矢作川さかな釣り大会(矢作川で釣れるアユ以外の魚が対象で、いろんな種類をつるのをきそう)
 まずは、体験を通し、足もとの川にいる生きものを見てもらうこと、つかまえてもらうことが大切。そのために、軽トラを使った移動式の水族館を不定期に開催している。

キャッチフレーズ

市民と川をつなぐ、みんな川に来てよ。

会のモットー(何を大切にしているか)

- ・川の現状を正しく見る。(調査、研究だけでなく、釣りや遊びを通して生きものをちゃんと見る)
- ・行政、漁協、土地改良区、矢作川研究所など、河川管理者とちゃんとつながる。
- ・川の良い所を見つける。(悪い所は、誰でもわかる。川を好きにならないと、良い所は見つけられない)
- ・川遊びのおもしろさを伝える。子どもは、遊んだ川を忘れない。子どもと一緒に川で遊んだ青年が、子どもを連れてまた川に来る。「夏丸さん、昔あそこの橋の下で、おれ〇〇〇をたくさん捕ったよね！」阿部さんによると「この一言は、自然環境に対する不毛な議論より、ぼくは百倍価値があると思っている。」とのこと。

設立から現在に至るまで変化したこと

世間の川に対する見方が変わってきた。親子川遊びを始めた当初「あんな川に子供を入れて、病気にする気か」「気が狂っている」などと散々いわれた。一度は死んだと思われていた家下川も、自らの力(自然の再生力)で生き物が増えている(取材日にもガサガサをしたが、少しの時間で本当にたくさんの魚がとれる)。みんなで川遊びをすることで、それを知ってもらえたことは大きい。
 楽しく遊んだり、しつこく話をすることで、まわりの河川関係者がアユ以外の話も聞いてくれるようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

矢作川研究所、矢作川漁協、土地改良区、家下川リバーキープーズ、三河淡水生物ネットワークなど

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

土地改良区と協力して水田魚道を作った。矢作川研究所に提案し、コンクリート水路に、水深のあるマスを作った。多くの河川管理者、市民グループなどと協力して、コンクリート水路に、草を植えたり、砂利を入れたりし、魚の産卵場所、越冬場所を増した。子供たちと本気で川遊びをし、川に関心を持つ子どもをふやしている。

現在直面している課題

やりたいことが多すぎる。しかしメンバーはすくなく、みな仕事が忙しい。

今後やってみたいこと

(これは水族館としてではなく、個人的な想いのことだが)川で子どもとともに深く遊びたい。
以前、1歳の子供を連れた親が川遊びイベントに参加してくれたことがあった。オムツをつけたままその子は川に座っていた(紙オムツは水吸ってパンパン)んだけど、コネコネ何かを触っている。よく見ると、死んだ魚をずっといじくりまわしていた。子どもは死んだ魚とも、話ができる。そんな子どもたちに、大人が教えられることがあるだろうか。川での体験が思い出となり、遊んだ川がやがて、かれらのふるさとなになれば、それだけでいい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>子供と地元の川に着目するきっかけは？

<答え>

昔はBE-PALというアウトドア雑誌の関係もあり、四万十川やら何やら、遠い綺麗な川にばかり行っていた。地元の矢作川や家下川を見ていなかった。ある時、家下川で小学生が遊んでおり「お前ら、何やってるんだ」と聞くと、たくさんの魚をとっていた。地元の汚いと思っていた川にも本当にたくさんの魚がいることを子供に教えられた。

その他、伝えたいこと

川は難しい。

川をどういじったら、形状がどうなる、生きものがどうなるというのが、河川管理者も分かってないはず。阿部さん曰く「自慢じゃないけど、僕もよく分からない」。しかし、分からないのを理由にしてやらないっていう河川管理者が多すぎるのは残念。分からないなら知ろうとしよう。分からないなら試してみよう。こんな面白いことがやれる立場にいるのに。

でも、ある意味、川は簡単だ。川の魚は、ほっといても(エサをやらなくても)増える。川ガキは、ほっといても(おもちやを与えなくても)遊ぶ。

それが何でいなくなるんだろう？ 答えは案外、簡単なのかもしれない。

写真



↑取材&ガサガサした家下川



↑「ナマズが子魚をバクバク食っていた！」と嬉しそうに話してくれた夏丸さん



↑何はともあれ、まずはガサガサ



↑短時間でたくさんの魚がとれた、豊かな川



↑取材は川の土手で、場所が良かったからかたくさんの話をお聞きすることが出来た

じさんじょの会

調査団体名 : じさんじょの会
 設立年 : 2000(平成12)年
 団体URL :
 活動拠点 : 岡崎市千万町木下
 取材日 : 2014年11月15日

団体代表者名 : 荻野昌彦
 対応してくれた人の名前 : 荻野昌彦
 調査員 : 唐澤晋平、唐澤 萌
 レポート作成者 : 唐澤 萌

活動内容

地域に残っていた茅葺屋敷を整備しなおし主な拠点として活動。田植え、稲刈り、餅つきなど各種イベントの主催。イベントには名古屋、豊橋などから参加する人も多く、街の住人と地域住人の間に交流がうまれた。参加者には村民制度に加わってもらい、会費を徴収する代わりに年間のイベントに自由に参加できるようにしてリピーターを獲得。茅葺屋敷では地域の女性たちによる物販もあり、こんにゃく、五平餅などがよく売れた。それらは少なからず女性たちの現金収入となり、また、家に閉じこもりがちなお年寄りや女性が集まる良い機会になっていた。屋敷は宿泊施設としても開放していて、地域外の多くの団体が利用していた。その中の一つ、happypunchは今でも地域の畑を借りて週末農業をしており、他にもお祭や盆踊り大会などにも積極的に参加、地域のメンバーとして受け入れられている。

キャッチフレーズ

つくりつづける、ふるさとづくり

会のモットー(何を大切にしているか)

和気あいあい 明るく 楽しく

設立から現在に至るまで変化したこと

2000年、千万町小学校廃校の危機感から、移住者人口の拡大を目的として茅葺屋敷での活動を始めた。2006年、岡崎市に編入。2014年、地主の意向で屋敷を返還することとなり活動の拠点を失う。また同時に、茅葺屋敷への来客数も頭打ちになっていたこと、そして小学校も廃校となったことにより、今、会の活動の転換期をむかえている。

連携している団体・専門家・自治体など

ふるさとづくり委員会、happypunch(農業サークル)、岡崎市

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

活動内容に同じ

現在直面している課題

茅葺屋敷にかわる新たな活動拠点を作ること。(廃校になった小学校を利用する案も出ているが、市の施設なので活動に制約がかかってしまう。)メンバーの世代交代の時期をむかえていること。
 茅葺屋敷では不十分だった、移住者人口を増やすための対策の強化。
 地域が活性化しているとはどんな姿なのか。「活性化」そのものの共通認識の模索が、今一度必要。

今後やってみたいこと

茅葺屋敷での活動では移住希望者を獲得するまでは至ったが、その後様々な問題が表面化した。改めてマッチングの難しさに気付かされた。今後は新たな拠点で地場の食材を売ったり、イベントを開催することで地域のPR活動をすると同時に、移住希望者リストの作成と、空き家情報リストの作成し、その両者のマッチングを、より積極的にアプローチしていきたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

岡崎市の企画課、商工会、マスコミ、政治家

チームオリジナルの質問

<質問内容>じさんじょの会の名前の由来

<答え>

じさんじょとは、絶滅危惧種であるヨシノボリの呼び名。集落を流れる川にたくさん生息し、極ありふれた生き物だったが、昭和40年代から環境の変化や川の汚染により30年近くにわたって全く姿を見なくなっていた。しかし近年また目撃されるようになった。このじさんじょの復活のように、地域を再び活性化させたいという思いが会の名前に込められている。また、語感も「地産」や「自然薯」などに通じて面白い。

チームオリジナルの質問

<質問内容>じさんじょの会を運営するにあたって難しかったこと

<答え>

平日、周辺の町へ働きに出ている住民も多い中、土日に集中して活動せざるをえないため、それを負担に感じる住民も一部いた。また、茅葺屋敷の運営を維持していく上でどうしても仕事を当番制にすることもあり、有志で始めた活動がいつのまにか義務化していまい、報酬が出ないことへの不満が出たこともあった。

目に見える成果がすぐに出る活動ではないので周囲への理解が得にくいと同時に、自分たちのモチベーションを保つことも時に大変だった。

その他、伝えたいこと

少子化、高齢化、過疎化、地域の抱える問題は山積しているが、どれもいずれは日本が全国的に抱える問題ばかり。その先陣を切っている、先駆者であることを楽しみたい。

写真



田んぼで農業体験



昔ながらの結婚式

額田林業クラブ

調査団体名 : 額田林業クラブ
 設立年 : 1976(昭和51)年
 団体URL :
 活動拠点 : 愛知県岡崎市額田
 取材日 : 2013年11月27日
 会員数 : 男49人、女12人

団体代表者名 : 山本恵一 会長
 対応してくれた人の名前 : 山本恵一
 調査員 : 唐澤晋平、今村 豊
 レポート作成者 : 今村 豊

活動内容

①優良材生産と地元建築物への活用 ②都市との交流 ③小中学生への森林環境教育の推進 ④女性部による「つまもの」の生産と出荷(紹介は次の機会)

キャッチフレーズ

額田の森林と共に、これまでも、これから

会のモットー(何を大切にしているか)

自分達が情熱をかけて育てた優良材を、自ら伐って搬出して地元で活用すること
 ～岡崎女子短期大学付属第二早蕨(さわらび)幼稚園の事例～

・地元材スギ、末口直径30cm、8m～9m材、130本の調達

山本会長には、地域の森林資源育成や優良材づくりなどの森づくりに対する熱い情熱と、皆を引っ張っていく力強いリーダーシップがあります。その姿勢は、設立当初から現在に至るまで一貫して変わりません。優良材生産に情熱をかけたひとつの成果として、平成25年に岡崎市内に建てられた「岡崎女子短期大学付属第二早蕨(さわらび)幼稚園」(平成25年11月竣工)の園舎への建築材の提供が挙げられます。この園舎建築のために使用する「地元材スギ、末口直径30cm、8m材、130本」を地元の木によって調達したいという園長さんの要望に応え、山本さんが会員に声をかけ、額田林業クラブでは会員の山から3ヶ月以内の短い納期内に、自分達の手によって伐採・搬出してこれらの材を集めました。しかも、伐採時には地元の子供たちに見学してもらって、しっかりと林業を伝えています。「末口直径30cmの8m材を130本」というオーダーは、間伐を計画的に行い、搬出用の作業道が開設されている等、森づくりに真剣に取り組まれている組織でないと絶対に調達不可能な内容です。山本さんは仲間9名でこの困難な作業をやり抜きました。搬出された素材も、山本さん達の苦勞に配慮した岡崎森林組合が発注者と度重なる交渉を行って、市場価格より高額で納品することができました。

・顔の見える地域林業、日本の林業の理想形

地元の子供たちのために、クラブ会員の手によって苦勞して育ててきた森林を、クラブ員が一体となって、きちんと自らの手によって伐採し活用された今回の取り組みは、正に地域林業のあるべき理想の形と言えます。こうした取り組みの先頭に立って、森づくりから木づかいまでをリードしてきた山本さんを筆頭とする「額田林業クラブ」の活躍は、日本林業の誇りであり、自伐林家と顔の見える地域林業の理想形として、これからの地域林業、日本の林業を考える上で学ばべき多くのヒントを与えてくれます。

設立から現在に至るまで変化したこと

・優良材生産の取り組み

1976年(昭和51年)にクラブが創立した当時、ヒノキ無節の柱材の優良材生産を目指していました。間伐、枝打ちを計画的に行い、昭和60年から柱材の製材、格付け、展示販売を行いました。当時、3m、3.5寸角の柱材で1本あたり15,000円から40,000円(120万円/m³)もしたそうです。ところが、平成25年になると3m、4寸角の柱材で1本あたり3,000円から13,000円(35万円/m³)となっており、当時の約3割の金額になってしまったとのこと。それでも、しっかりと枝打ちをされたヒノキ優良材には違いなく、通常のスギ製品価格となる7～10万円/m³と比較すると非常に大きな優位性があります。こうした製品の高値取引も、優良材を作ろうと計画的に実践されてきたクラブの大きな成果と言えます。現在も毎年開催される、「岡崎市農林業祭」、「ぬかたふるさとまつり」において約80～100本の展示販売を行っており、地元自伐林家の熱い意気込みが伝わってきます。

枝打ち・間伐の指導や森林環境教育等の取り組み

最近では、都市との交流や地元小中学生に対する枝打ち・間伐の指導や森林環境教育が非常に盛んになってきました。例えば、枝打ち・間伐指導を行う「おと川リバーヘッド大作戦」は現在まで13年間継続されています。平成23年に千万町で開催された「全国ネイチャーゲーム研究大会」では全国から160名の方が集まり、間伐指導をされました。また、平成25年には「第9回矢作川森の健康診断」が開催され、すべての会員と岡崎市民を含む220名が参加されました。平成26年には「中部北陸ブロック林業グループコンクール」が開催され、第二早蕨幼稚園の現地見学、額田ヒノキによる首相官邸用テーブル・イスの寄贈事例を紹介したとのことです。

額田中学校に対しては間伐指導を18年間も継続されており、平成26年には生徒74名が間伐を行いました。その他にも幸田町中央小学校70名、豊富小学校40名の間伐指導を行っています。また、平成17年には額田中学校により、間伐材を使ってテーブル・ベンチを作成して公共施設へ寄贈された事例が、全国から5校の事例に選ばれて、「森で学ぶ活動プログラム集」に掲載されました。平成26年にも額田中学校では同様の取り組みが行われました。

連携している団体・専門家・自治体など

岡崎森林組合、愛知県林務課、岡崎市林務課・自然共生課自然体験班、水守森支援隊、岡崎炭焼の会、乙川水源の森づくり実行委員会、農業協同組合、漁業協同組合

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、山村・森林資源活用など）

・山の境界確認作業

山づくりに興味や関心のない若い方が多く、クラブへの加入もほとんどないのが現実ですが、こうした状況を少しでも打開しようと、クラブでは山の境が不明な個所について、境界の確認作業に立ち会うなど山づくりの支援作業を行っています。

・全会員の林業に対する継続した熱心な勉強姿勢・林業先進地調査

年会費は1万円を徴収し、その会費から会員全員が「現代林業」「林業新知識」「林業あいち」を購入されて、会員同士で様々な林業に関する事柄を熱心に勉強されています。また、年一回は必ず先進地調査に出かけて林業技術の習得と会員同士の親睦を深めており、クラブ員は林業に対する意識レベルが高く、クラブ員同士の仲も大変良いのが特徴です。本当に理想的な正に全国の林業研究グループの鏡と言えます。

現在直面している課題

・若いクラブ員の加入を望む

クラブ員が高齢化しているので、特に若い方の加入を希望しています。若い方は一般的に山に関心がなく、自分の山がどこにあるのかわからない方も多いのが実態です。そこで、クラブとしては林業に関わるあらゆる指導をしっかりと行うので、ぜひ仲間に入ってほしい切望されています。

・地元額田地区の岡崎森林組合職員が欲しい

岡崎森林組合の職員に地元額田出身者がいないので、地域の実情に対する理解やクラブへの参加、クラブと一体となった取り組み、意見・要望等において速やかな対応が難しいとのことです。地元額田出身の岡崎森林組合職員がいたら、もう少しクラブ活動がやりやすいと思います、とのことです。

・岡崎市による水源基金の創設を

額田町が岡崎市と合併したことで、以前、額田町にあった水道水1t＝1円を財源とした水源森づくり基金がなくなってしまったので、岡崎市に復活していただきたい、との希望も語られました。岡崎市が水源基金を実施すると、年間4,000万円の基金が生まれる、とのことです。

・山地災害発生に対する危惧

平成23年に台風12号が紀伊半島を直撃し、深層崩壊による土砂災害ダムが発生したことにショックを受けた、とのことです。額田の人工林の山も間伐が遅れており、いつ山地災害が発生しても不思議でない放置林が年々増加しているのが現状で、非常に心配しており、クラブからも市民に働きかけて速やかに間伐を行い、健全な森林づくりを推進しなくては、とのことです。

今後やってみたいこと

愛知県でも事例が増えてきている「木の駅プロジェクト」にクラブとして取り組むことが決定されました。人工林は利用できる林齢に達したら自ら伐って搬出・利用すること、それに加えて、今度はかつて切り捨てた未利用材も搬出し、木質バイオマスとして利用していくと力強く話されていました。山本さんの自分達の力でやる意気込みには感心します。

チームオリジナルの質問

<質問内容>今一番推進したいことは何ですか

<答え>岡崎市の50%の方が額田の山を水源とする水を飲んでおり、もっと街の方に森林の大切さを理解してほしい、と語っておられました。良い山とは、適正な林分密度で林内に陽光が差し込み、下層植生が繁茂しており、その結果、森林土壌が形成され水源かん養機能が発揮されている山です。山本さんは、間伐放置林が目につくことから、こうしたクラブ員が整備した良い山をもっと街の方に見学してもらい、森林整備の重要性やこうした森林整備に取り組んでいるクラブの活躍についても、理解してほしいと語っておられました。さすがに、森林整備を実践されている方だけに、自分達のつくりあげた山を良い事例として取り上げる、自信と自負が感じられました。

チームオリジナルの質問

<質問内容>「森の民」としての生き様とは

<答え>地域や現場を知っている「森の民」が将来を考えて立派な山をつくり、それを自ら伐採・搬出して、地元で活用していくことが、林業の真の実践者としての「格好いい」生き様だと思います。これからも益々地域リーダーとして、情熱・熱意を持って地域林業の振興に努め、1ha1億円の林業を目指して日本の林業に元気を与え、自分達の後に続く林業後継者を育て導きたい、話されていました。本当に、実に「格好いい」山本会長でした。

その他伝えたいこと

・全国林業グループコンテストにおける優秀な成績

過去に全国林業グループコンテストに参加しており優秀な成績を残されています。質の高い活動を継続されていること、こうした活動をきちんと報告して、コンクールに参加されていることに大変頭が下がります。

平成10年度 額田林業クラブ女性部 農林水産大臣賞を受賞

平成15年度 額田林業クラブ男性部 農林水産大臣賞を受賞

平成22年度 額田林業クラブ男性部 林野庁長官賞を受賞

中でも平成15年度の農林水産大臣賞の受賞は、テーマを「林業地域から発信する地域おこしの取り組み」とし、①1ha1億円林業 ②三河材「額田ヒノキ」のブランド化 ③森林・林業教育の推進 ④都市との交流の4項目について発表され、講評では「額田林業クラブの優良材生産活動から森林・林業教育、さらには都市との交流といった幅広い総合的な活動は、林業グループの活動として考えられるエッセンスを網羅しており、他の手本となる」と絶賛され、全国トップの林業グループとして認識されています。なお、女性部の取り組みも大変活発ですが、紹介は次の機会とします。

写真



素材を提供した会員の山 手前左側が山本さん



岡崎女子短期大学付属第二早蕨(さわらび)幼稚園の外観



会員の山から調達したスギ丸太



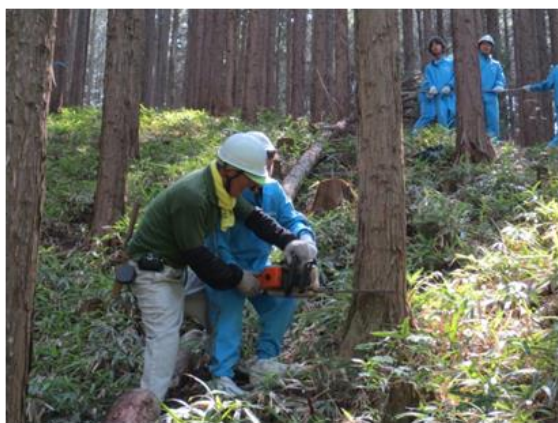
木の温もりを喜ぶ園児の皆さん



地元材をふんだんに使った幼稚園の内部



幼稚園外部の廊下の丸太も特徴的



額田中学校の間伐指導1



額田中学校の間伐指導2



ヒノキ柱材 格付作業



1ha1億円林業を目指すヒノキの柱材展示

宮ザキ園

調査団体名	宮ザキ園	団体代表者名	梅村篤志
設立年	1820年頃	対応してくれた人の名前	梅村篤志
団体URL	http://www.miyazakien.com/		
活動拠点	愛知県岡崎石原町	調査員	今村 豊、唐澤晋平
取材日	2014年11月17日	レポート作成者	唐澤晋平

活動内容

お茶の栽培(3ha)と、自社工場での加工、梱包、販売までを一貫して行っている。年間の生産量(製品の状態)は年にもよるが1600kg~2000kgくらい。地域に茶の生産者は50人くらいいて、委託加工や買取加工をしている。普段は家族5人で経営しているが、5月の連休明けくらいから夏までが茶の収穫期で、鮮度を失わないうちに一気に加工までするため寝る暇もないほど忙しい。1日1000kgの茶葉を順次加工し、製品としては200kgのものが出来る。その時期だけは地域の方にも手伝ってもらい、10人~15人くらいで作業している。お茶は全て有機無農薬栽培で、15年ほど前に県内で初めて有機のJAS認定を受けた。以前は農協に卸していたが、今は自社で産直や百貨店などに直接営業している。お茶にこだわる方が直接店に買いに来てくれる場合もある。

キャッチフレーズ

- ・自然のままに
- ・People make a juice, God make the tea 人々はジュースを作り、神がお茶を作る
工業製品とは違うので、同じものは作れない。一煎一煎の出会いを楽しんで欲しいという意味。

会のモットー(何を大切にしているか)

出来るだけ人の手をかけず、自然のままに仕立てていく。
お茶は収穫したものがそのまま加工されて口に入るので、農薬や化学肥料は使いたくない。肥料も最低限のものしか与えないようにしている。

設立から現在に至るまで変化したこと

おおよそ190年前に創業し、現在6代目。この地域は寒暖の差が激しく霧が良く出る自然環境でお茶の栽培に適しており、夏場は茶業、冬場は林業というスタイルが地域の生業となっていた。しかし昭和30年代に木材価格が下落し、林業が衰退したことでこの形態が崩れ、街に勤める人が増えて茶業も衰退していった。お茶の値段は下げ止まりの状態だが、ゆるやかに需要と供給が減ってきている。

連携している団体・専門家・自治体など

あいち三河農協、宮崎茶業組合、東海農政局、市役所、商工会など。
6次産業化に取り組んでいるということで、行政からイベント出展などにお声がかかることがある。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

地域に若い人が戻ってくることができるように、お茶という地域資源を活かして雇用を創っていくことを目指している。以前勤めていた茶業試験場の上司と紅茶の研究をしており、当時は珍しかった国産紅茶と一緒に作り、宮ザキ園のオリジナル商品として「三河わ紅茶」を開発した。当初はインドやスリランカから講師を招き入れダージリンやウバのような高級紅茶を国産で作れないかと思って試行錯誤したが、残念ながらダージリンやウバはつくれない。しかし日本には四季がある。気候や風土などの条件も違う中で同じものを目指してもダージリンは作れないのだ。環境にあった収穫期や茶葉の発酵時間を調整し、日本の環境に合ったものにしようと方向性をシフトして、半発酵で日本人の口に合うような柔らかい味に仕上げた。

現在直面している課題

生産力不足。人手が足りない。収穫期に手伝いに来てくれるのも高齢者のみで、勤めている若い人はその時期だけ来てもらうということが出来ない。今年から青年就農の研修機関として認定を受け、研修生を受け入れると人件費の補助金が出るようになったので、担い手育成をしていきたい。

今後やってみたいこと

12月には紅茶の製造機械が納入される。地域の方には無料で貸し出して、オリジナルの紅茶を作り、訪れる人に地域を上げて紅茶でおもてなしをするという「紅茶街道」にしていきたい。

また、茶の実を絞った油の商品開発を計画している。茶の実油は食用や美容用などで高級油として販売されている。寒い時期に葉を摘む「秋冬番茶」というものがあり、これも商品にしてみたい。冬季の仕事になればと思う。

さらにお茶の文化をアメリカやヨーロッパなど、海外に発信していくこともやっていきたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

県や市、農協、農政局と連携しながら販路開拓を進めていく必要がある。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

梅村さんは現在35歳とのことであまり同世代が地域にいないと思うが、後を継いで地域に残ることに抵抗はなかった？

<答え>

同級生は12人いたが、今地元に残っているのは自分だけで寂しく思う。農業高校を出て、静岡で2年間茶業試験場に勤めて、そのまま後を継いだが、お茶を継ぐことが当然だと思っていた。これまで続けてきたものを守らなくてはという使命感をもっている。

その他、伝えたいこと

2013年5月にNPO法人インディアンサマーを設立し、現在理事長を務めている。もともと額田のくらがり溪谷で音楽イベントを主宰していたNukata Sound Projectのメンバーが中心になって設立し、現在の会員は20名程度。

活動としては、サイクリングの楽しさを発信し観光地の活性化につなげる取り組みや、障がい者のために脳の活性化を促す音楽トランポリン療法イベントの開催、上記した三河紅茶街道の取り組みなど、地域活性化に想いのある有志が様々なプロジェクトを展開している。

団体名である「インディアンサマー」は、日本語で小春日和。冬に時々温かい日があることをアメリカでそのように呼ぶことにちなんでいて、地域経済を暖めていきたいという思いを込めている。



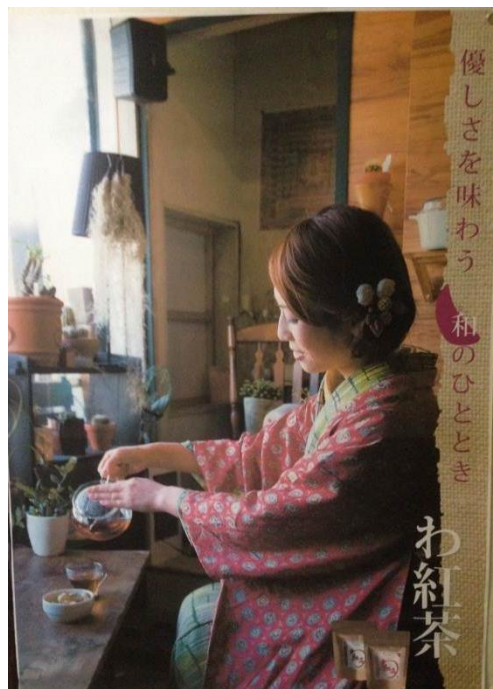
宮ザキ園外観



商品のラインナップ。贈答用のパッケージもある。



茶畑の様子と梅村さん(右側)



わ紅茶のポスター。
モデルは梅村さんの奥さん。

東幡豆漁業協同組合

調査団体名 : 東幡豆漁業協同組合
 設立年 : 1950(昭和25)年
 団体URL : <http://www.katch.ne.jp/~higasihazu-gk/>
 活動拠点 : 愛知県西尾市東幡豆町
 取材日 : 2015年1月21日

団体代表者名 : 石川金男
 対応してくれた人の名前 : 石川金男
 調査員 : 丹羽健司、洲崎燈子
 レポート作成者 : 丹羽健司

活動内容

東幡豆町の小学生たちはもとより、県内外の子供や大人に「前島で自然とにらめっ子～干潟生物セミナー～」はじめ各種の海洋教育プログラムを提供している。

まず、①干潟に足を踏み入れる。②何か(貝やカニ、ゴカイ、生き物、風景...)を発見する。③それからおもむろにレクチャー開始...1)三河湾の現状(貧酸素隕、赤潮)。2)干潟の生き物(豊かさ、食物連鎖)。3)干潟の機能(浄化作用、アサリの浄化実験、命のゆりかご)...④そしてマテ貝採りやアサリ堀りを体験して、場合によってはバーベキューというお楽しみもついている。これらのプログラムを通して参加者は、山から海のつながりの大切さや干潟の機能、海の恵みを五感と科学で知ることができる。

キャッチフレーズ

山川海、自然の循環が一番大事！

会のモットー(何を大切にしているか)

「海辺の子供たちが目の前の海のことをあまりに知らない。東幡豆では目の前に渚の生物の宝庫「前島」があり、島につながる干潟が広がっている。干潮で現われた干潟を歩いて渡り、アサリやマテ貝を採り、島から振り返ると自分たちの暮らす町の素晴らしい風景が見える。まず、それをさせたい。渚や干潟、磯との接し方を知らない。まず、海辺の子らに海の恵みや浜辺に暮らすことの素晴らしさを伝えたい。」と石川組合長。そして「こういうことは好きでなきゃできん！」と熱く語る。

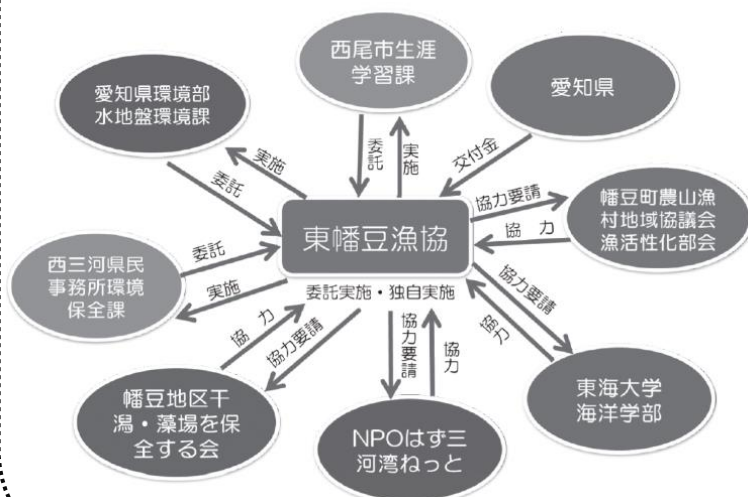
設立から現在に至るまで変化したこと

2003年頃から東幡豆保育園、2009年から東幡豆小学校を対象に「ふるさと幡豆の海の自然観察学習」を、2006年頃からは「ふるさとワクワク体験塾」で無人島探検や漁業体験、生き物学習、干潟観察などを関係機関と協力して企画し実践してきた。フィールド提供や漁船・魚介類の提供から石川組合長自ら講師を務めるなど漁協の自主的なボランティア活動的に取り組んできた。その内容は干潟や浅場の役割や赤潮や貧酸素隕発生要因についての学習、アサリの水質浄化機能から潮干狩りと試食まで、当初の自然観察や漁業体験的なイベントから急速に深化している。

2015年3月には矢作川流域圏懇談会のつながりで矢作ダムの堆砂を活用してトンボロ干潟付近の一角に人工干潟を造成することが実験的に始まった。今後山から海までつながるシンボリックな活動として浜辺からのバケツリレーによる搬入・造成イベントを夢想中。その後の経過観察などまで山から海までのつながりをメインにした学習の場になろうとしている。

連携している団体・専門家・自治体など

海洋教育における漁協の取り組みと機能をめぐって—愛知県東幡豆漁協を事例に—



東海大学紀要海洋学部「海—自然と文化」12-1-12-22(2012年)より

担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

潮干狩りは8月初旬で終わる。子供たちの夏休みにもっと前島やトンボロ干潟に来てもらいたい。前島には休憩所もあるので観光資源としてもっと活用したい。

現在直面している課題

- ①海洋教育の常駐スタッフがほしい。
- ②上流から砂が来ない。海底の砂が固くなっている。柔らかく小動物が潜れるやわらかい砂が必要。砂が流れないと水も死ぬ。

今後やってみたいこと

山に「林間学校」があるように、前島に「海浜学校」を作りたい。

山から海までのつながりや干潟の機能、磯の生物の豊かさ、そして漁業の大切さと醍醐味を伝える場、しっかり体感できる場を作りたい。それがいつか漁師を育てることにつながると思う。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

海や干潟のこと、あるいは山から海までのつながりに関心を寄せる人たちはいっぱいいるはず。それらの人たちをあつめてこういう活動の応援団になってほしい。

プログラムの一例

時刻	内容
10:00～	東幡豆海岸集合・説明など
10:30～	干潟生物セミナー（東幡豆漁協組合長）、マテガイ採り
12:00～	昼食（バーベキュー、アサリ汁） 海の世界学習（アサリの浄化実験など） 質疑応答・意見交換
13:30～	三河湾ミニクルージング
15:00～	バス乗車・出発

東海大学紀要海洋学部「海—自然と文化」12-1-12-22(2012年)より

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞海洋教育を続けてよかったことは？

＜答え＞

子どもたちは干潟や磯で海に触れると確実に変わり、海に親しみを感じてくれる。特に地元の子らは島から陸を眺めると感動してくれる。

取材者の感想

この取り組みは東幡豆漁協の取り組みというより石川金男氏のライフワーク、漁協の業としての取り組みでなく石川金男個人の使命感が漁協や関係団体を巻き込み突き動かした成果だと思った。孟子曰く「至誠にして動かざるものは、未だこれ有らざるなり。」

その他、伝えたいこと

山には山の働き、川には川の働き、海には海の働きがある。山と川がしっかり水や砂の循環を行えば、海はそれを受け止める。もっと、実際の海に浜辺に、干潟に足を運んでほしいし、海からも山に出掛けたい。現場で空気を吸い、景色を眺めながらつながっていきたい。続けることで子供たちには確実に伝わっていくが、これからは漁業の当事者たちこそが理解を深め、より多くの人々に働きかけていくことが必要と痛感している。

写真



左上:トンボロ干潟を前島に向かう子供たち 左下:石川組合長のレクチャー 右上:潮干狩り 右下:石川組合長

佐久島Oyaoya cafeもんぺまるけ

調査団体名 : 佐久島Oyaoya cafeもんぺまるけ
設立年 : 2009(平成21)年
団体URL : <http://sakushiba.blog102.fc2.com/>
活動拠点 : 愛知県西尾市一色町佐久島立岩47
取材日 : 2014年12月21日

団体代表者名 : 神谷芝保
対応してくれた人の名前 : 神谷芝保
調査員 : 近藤朗、浜口美穂、洲崎燈子
レポート作成者 : 洲崎燈子

活動内容

畑で育ったお野菜や島の素材を使ったおやつ＝Oyaoyaを提供するカフェを営業している。ハンドメイドの雑貨類も販売している。金～月曜の営業で、冬季休業あり。店主の神谷さんが仲間たちに協力してもらいながら、床が抜けてつる植物と竹藪に覆われていた廃屋を古民家カフェに再生させた。ライブや流しそうめん、餅つき大会などのイベントや「まるけマルシェ」と名付けたマルシェも開催している。「まるけ」は「～まみれ、～でいっぱい」の意味で、畑をやっているから店名を「もんぺまるけ」にした。来店するお客さんの多くは東海3県の若者で、島の人も訪れる。

キャッチフレーズ

種まきからキッチンまで

会のモットー(何を大切にしているか)

畑で育ったお野菜や島の素材など、誰が育てているかたどれるものを食材にしている。

設立から現在に至るまで変化したこと

(店主の神谷さんが)いろいろなことができるようになった。例えばチェーンソーを使った薪づくり。炊飯やストーブ、お風呂を沸かすのに薪を使っている。薪材は森林組合が切捨間伐する広葉樹でまかなえる。佐久島に移り住む前、通いで来ていた頃は島の人に怪しまれたりもしたが、住み着くようになってからは助けてもらえるようになった。野菜や魚を頂いたり、家具職人さんが家具づくりを手伝ってくれたり、お世話になっている方の家にあがりこんで食事をしたりテレビを見させてもらったりしている。今年は観光協会の委員や「島を美しくつくる会」のいにしえ分科会のリーダーをしている。佐久島太鼓の練習に毎週参加するようになり、篠笛も吹くようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

島を美しくつくる会、名城大学谷田研究室、イニユニックビレッジ

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

お店の運営を手伝ってくれるバイトを雇っている。佐久島ブランドとしてハブ茶の生産を始めた。佐久島ブランド品を増やしたい。ちなみにハブ茶の原材料はエビスグサの実だが、枝は焚きつけになって助かる。

現在直面している課題

相方がいない。1人でやれることは大体できるようになったので、次のステージに進みたい。

今後やってみたいこと

今は店舗に寝泊まりしているので、自分の住居になる小屋をつくりたい(現在製作中)。畑や、海水からの塩づくりも、もっとちゃんとやりたい。また、島でウェディングをやれるようにしたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

やはり相方です。

チームオリジナルの質問

<質問内容>なぜこのお店を始めようと思ったのですか。

<答え>以前は名古屋のカフェで働きながら好きなことをしていたが(半カフェ半X)、周囲の皆が畑をやっている自分もやりたくなり、場所を探していたら最初にここを見つけた。最初は週の半分を名古屋、半分をここで過ごしていた。廃屋を建て直し、周囲の竹を伐採するために、以前弟が在籍していた名城大学理工学部建築学科の谷田研究室に企画を持っていったら話に乗ってくれ、4~5回作業に協力しに来てくれた。竹の伐採・抜根は友達や、以前働いていたカフェのお客さんにも手伝ってもらった。家の建て直しで難しいところは大工をしている友人に頼んだ。また、島でたまたま出会った、ここに別荘があるおじさんが何でもできる方で、建て直しの指導をしてくれた。設計図なしで壁や床をはがしつつ考えながら作業をしたが、設計図の必要性を認識した。こうした作業を、島に通いながら半年かけて行った。

チームオリジナルの質問

<質問内容>一年間の過ごし方を教えてください。

<答え>春から秋はカフェで働き、冬は店を閉めて東別院や甚目寺の手づくり朝市にお菓子を出品したり、家直しや小屋建てをしたり、長期の旅行をしたりする。

しばちゃん(店主の神谷さん)語録

- ・以前マイ箸を普及させるために自転車で日本一周旅行をしていたが、その時泊めてもらった石川の方が偶然来店してくれて驚いた。
- ・2006年にアースデイの実行委員会で出会った大人たちを見て、定職に就かなくても生きていけるんだと思った。
- ・今も島内外に泊めてもらえる家がたくさんある。どこでもストレスなく泊まれる。
- ・みんなに助けてもらっているの、ずっと独身だが1人で生きている感じがしない。

取材者のひとこと

取材をさせてもらったカフェは心癒やされるとても素敵な空間でした。取材の日は餅つき大会とマルシェがあり、その後にお話を聞いたのですが、取材中もお店のスタッフや仲間たちがてきぱきと後片付けをしてくれていて、みんなに支えられているお店なんだと実感しました。しばちゃんの人柄のなせる技だと感じました。取材者の浜口さんの、「しばちゃんのやりたいことが、みんなのやりたいことなんじゃないかな」という言葉が印象的でした。また、半農半Xと放浪癖を両立するライフスタイルを実現していることに感銘を受けました。

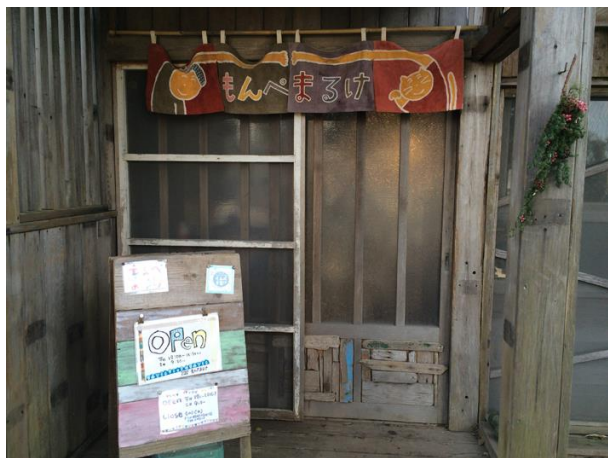
写真



カフェの前庭。餅つき大会&マルシェ開催中



左が神谷さん。取材者も餅つきに参加



おしゃれなカフェの玄関



お友達が描いた店内の絵



雑貨の販売コーナー



取材風景。中央が神谷さん

取材者名

浅田益章

今村 豊（根羽村森林組合）

大島光利（NPO法人奥矢作森林塾）

沖 章枝（水と緑を守る会・岡崎）

唐澤晋平（NPO法人日本の森バイオマスネットワーク）

唐澤 萌

國村恵子（愛知・川の会）

蔵治光一郎（東京大学 大学院農学生命科学研究科附属演習林 生態水文学研究所）

近藤 朗（愛知・川の会）

洲崎燈子（豊田市矢作川研究所）

高橋伸夫（西三河野鳥の会）

田中五月（一般社団法人 ClearWaterProject）

丹羽健司（地域再生機構）

蜂須賀功（岡崎市環境部 環境保全課）

浜口美穂（ライター）

真柄明洋（国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所）

松井賢子

村松憲吉（名古屋市水辺研究会）

森本徳恵（岡崎市環境部 環境保全課）

山本薫久（NPO法人都市と農山村交流スローライフセンター）

（五十音順）